

42269

教科書文庫

4
810
42-1930
20000
85184

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

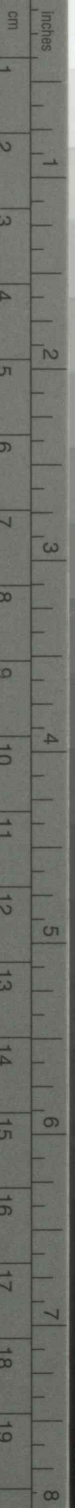


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



4b
810
昭5

改新女子國文
卷一



文部省檢定濟

昭和五年四月五日 高等女子學校國語科用

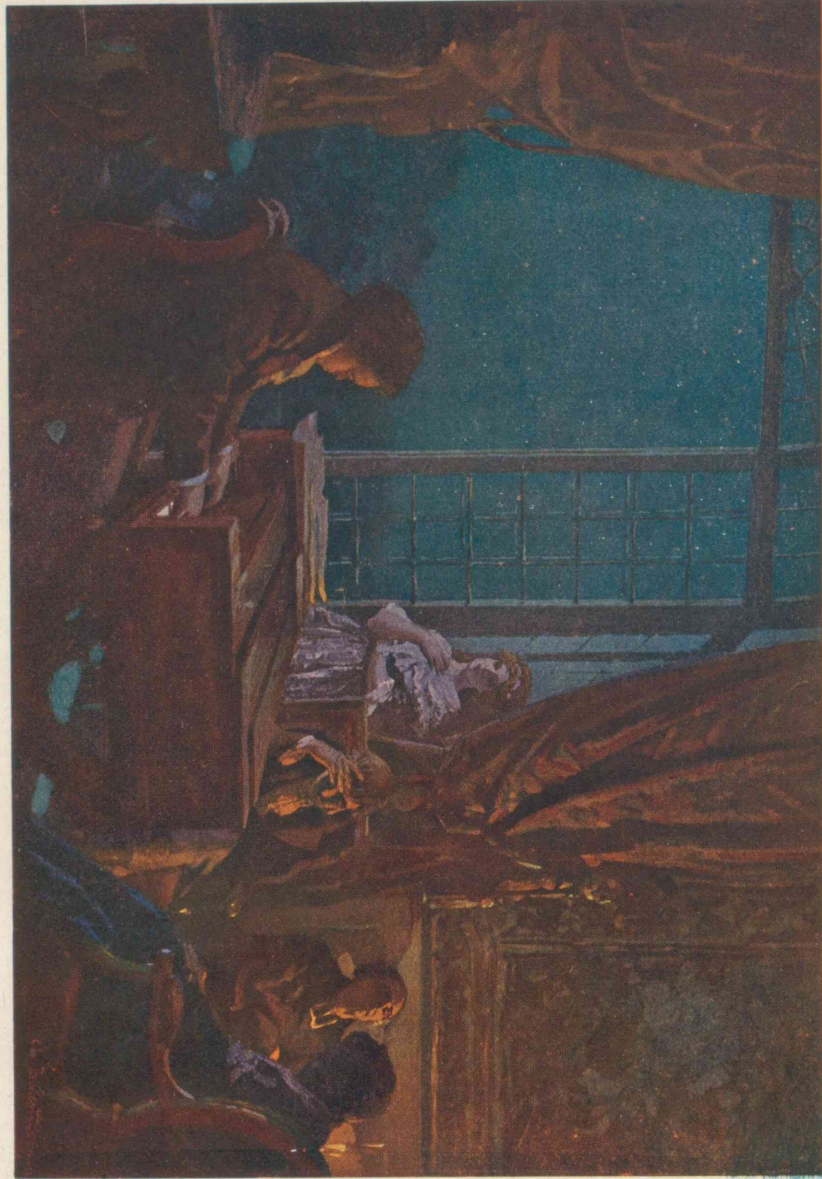
4b
810
昭5

文學博士 芳賀矢一 編
文學士 橋本進吉 訂補

改新女子國文

東京

合資會社 富山房發兌



バレンティニの曲

月光の曲



改新女子國文 卷一 目次

一	時は今	一
二	櫻	三
三	今上陛下の御幼時その一	七
四	今上陛下の御幼時その二	三
	明治神宮に参拜して(自修文)	六
五	お花畑の春雨	六
六	青葉	四
七	日の岬	六

八	朝鮮雜觀その一	翌
九	朝鮮雜觀その二	五
一〇	パリの若葉	五
	お祭 <small>(自修文)</small>	六
一一	ロンドンの一夜	七
一二	慈愛	七
一三	ベートーヴェンの話	八
一四	汝の母より	八
一五	鳥の愛情	九
一六	花えらみ	一〇
	花の傳説 <small>(自修文)</small>	一三
	武島羽衣	一〇
	姉崎正治	一〇
	牛山充	一〇
	川路柳虹	一〇
	岡本綺堂	一〇
	泉鏡花	一〇
	吉江喬松	一〇

一七	短夜の頃	島崎藤村	二八
一八	加賀の千代女	佐々政一	三〇
一九	七月の日記	夏目漱石	三〇
二〇	夕立	徳富健次郎	三〇
	白鷺の群 <small>(自修文)</small>	五十嵐力	三〇
二一	旅人となりて	吉田絃二郎	三〇
二二	山の歡喜	河井醉茗	三〇
二三	禮儀作法	三〇
	我が國の家庭 <small>(自修文)</small>	三〇
二四	鳴蟲の話	三〇
二五	新秋の望	近松秋江	三〇

二六 美しき國民性……………一八三

二七 月雪花……………一七三

二八 野田園の家……………一七〇

二九 金魚……………一六五

三〇 山の春……………一六〇

三一 漁人……………一五五

三二 白鷺……………一五〇

三三 文……………一四五

三四 子……………一四〇

三五 花……………一三五

三六 花……………一三〇

三七 花……………一二五

三八 花……………一二〇

三九 花……………一一五

四〇 花……………一一〇

四一 花……………一〇五

四二 花……………一〇〇

四三 花……………九五

四四 花……………九〇

四五 花……………八五

四六 花……………八〇

四七 花……………七五

四八 花……………七〇

四九 花……………六五

五〇 花……………六〇

五一 花……………五五

五二 花……………五〇

五三 花……………四五

五四 花……………四〇

五五 花……………三五

五六 花……………三〇

五七 花……………二五

五八 花……………二〇

五九 花……………一五

六〇 花……………一〇

六一 花……………五

改新女子國文 卷一

一時は今

もなか

春のよそほひ
しるし

一時は今春のもなか。

上る朝日に霞はるれば、
花のくれなゐ、若芽の緑、
艶えんなる春のよそほひしるし。

二

時は今春のもなか。

一時は今

のどけき

きほひ
をし

人生の春

いそしむ

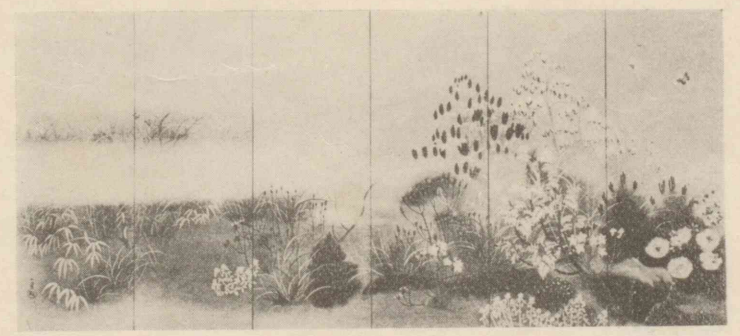
風あたたかに、水はぬるみて、
鳥のなく音に、魚のすがたに、
のどけき春の趣深し。

三

時は今春のもなか。
野山のながめ日々に變りて、
ものの生立よろづのきほひ、
さかゆく春の勢を、し。

四

をとめわれ、恵まるゝ身。
今人生の春を歩みて、
體すこやかに、心ゆたかに、
學の道にいそしむうれしき。



(筆虎小崎川) れづとおの春

二 櫻

櫻の咲くのは春の末である。春の日本は水蒸氣が多い。
どんよりと曇つて、寒くもなく、暑くもない日和を花曇と
いつて、夜は照りもせず、曇りもせぬおぼろ月夜。雲霞とま
がふ花には最もふさはしい景色である。そよそよと面を
吹くや春風。春の特色はどこまでものんびりとした心持
にあつて、きりつめたやうなはげしさ、きびしさの少しも
ないところにある。櫻はちやうどこの時の氣候にはぐく
まれて咲出でる花である。際立つた特色のないところが
即ちその特色である。賀茂真淵は

日和
(一)照りもせず曇
りもはてぬ春の
夜の、おぼろ月
夜にしくものぞ
なき。(新古今
集 大江千里)

(麗)
まがふ
ふさはしい

はぐくむ

特色
(二)江戸時代の國學
者、
明和六年(二四
七九年)歿、二四
七十三

にほひ出づ

(一)平安時代の歌人
紀友則の作。櫻
の花の散るをよ
める。と題して
古今集の部に
ある。春の部に
ひさかたの
しづ心

大宮人

(二)奈良時代の歌人
山部赤人の作。
新古今集の部
にある。しきの
もゝしきの



上野のさくら

うらうらとのどけき春の心より

にほひ出でたる山ざくら花

といつた。春の日は永い。

(二) ひさかたの光のどけき

春の日にしづ心なく

花の散るらん

櫻は永陽の日に最もふさはしい

花である。ここに大宮人のゆつた

まりとした優美な様子なども想ひ

浮かべられる。

(二) もゝしきの大宮人はいとまあれや

櫻かざしてけふもくらしつ

牛車の歩みおそく花見て歸る黄昏の景さながらの繪卷
物である。

(一) よしの山霞の奥は知

らねども見ゆるかぎ

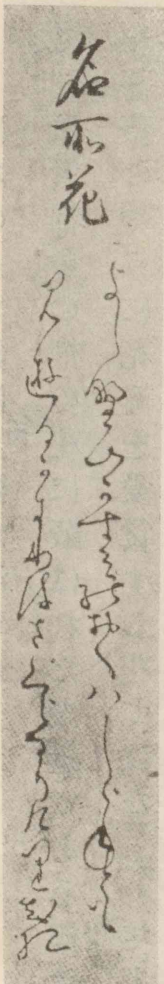
りは櫻なりけり

これは満山櫻の雲に包ま

れた吉野山の風景を詠んだのである。



交野の櫻 (筆實氏田前)

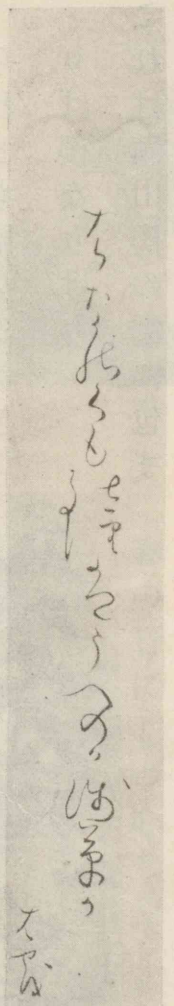


八田知紀筆

(一) 俳人、松尾芭蕉の句。

(一) はなのくも鐘は上野か浅草か

これは大都會の櫻の花に蔽はれた光景である。櫻は牡丹や薔薇のやうに花瓣を愛賞する花ではなくして、木として愛賞する花である。否、多くの木を集めて、人はたゞ花の



松尾芭蕉筆

中に在つて愛賞する花である。下に見て愛賞する花ではなくして、上にながめて愛賞する花である。春風四月、日本人はすべて花の中の人となるのである。



吉野 森月城筆

櫻

(一) 教育家。學習院
教授。今上陛下
御在學當時は初
等科主事として
親しく御指導申
し上げた。
令徳

拔群

詳細

三 今上陛下の御幼時 その一

石井國次^(一)

今上陛下の御令徳多くおはす中にも、第一に驚き奉る
のは、御記憶の拔群にあらせられることとあります。學習
院で今まで多くの生徒に接してまゐりましたが、陛下の
やうに御記憶の強い方は、見受けたことがありません。蟲
の名でも、貝の名でも、聯絡も系統もないことまで、一度御
覚えになつた以上は、決して御忘れになるといふことが
ありません。

この御記憶の拔群を上に、御研究心が非常に御強く、何
でもよい加減にして置くことが御嫌ひで、詳細に御質問

徹底的

になり、また御自分で徹底的に御研究になるのであります。例へば、歴史で聖徳太子のことを申し上げると、御歸りになつてから参考書を御調べになり、聖徳太子の憲法とはどんなものか、三寶とはどういふことかと御研究になる。理科で蝶の御話を申し上げると、蝶類圖説を御調べになつたり、盛んに御採集になつたりして、日本産の蝶は勿論、外國産のものまでも、御觀察になる。或は電氣の御話を申し上げれば、種々な器械を御取寄せになつて御實驗あそばされ、無線電信や電話のことまで、すつ



(端左) 下陛下今の時當學通御院習學

三寶

觀察

理解

かり御理解になるといふ風であります。旅行、登山の御趣味も豊富にいらせられ、單なる御運動としての外に、地圖や案内記をよく御調べになり、その産物や、動物、礦物から氣象のことまで熱心に御研究になる。萬事がかういふ風であらせられるから、御知識が確實で、且つ深みのあらせられることは、實に驚歎し奉る外はありません。

(一) 明治神宮に参拜して、明治天皇の日常御使用になつた御調度品を拜觀したものは、誰でもその御質素なのに感



今上陛下

(一) 東京府豊多摩郡代々幡町代々木。祭神は明治天皇と昭憲皇太后。
(二) 第百二十二代。調度品

遺傳

泣かないものはないと思ひますが、陛下もまたその御遺傳のせいか、御感化のせいか、御生來贅澤が御嫌ひでいらせられます。それですから御學用品なども、全く一般學生と同様なのを御用ひあそばされ、鉛筆などは、當時一錢五厘の鷲印のを好んで御使ひになり、しかも、それが非常に短くなるまで、決して御捨てになりません。消^(一)ゴムも當時四、五錢くらゐなものを、豆粒ほどになるまで御使用になり、御帳面でも、半紙や畫用紙でも、決してむだにはあそばしませんでした。それで大正三年三月陛下が初等科を御卒業あらせられると、陛下のこの御高德を一般兒童に知らしめたら、さぞ國民教育に裨益するところが多からう

Gum.
(護談)

裨益



攝政宮時代の今上陛下

と考へて、陛下の御使用になつた背囊、教科書、雜誌、筆入から、帳面、鉛筆、ゴム、その他陛下が御製作になつた手工品、圖畫、標本などを拜借して一室に陳列し、御教室や御控室などすべてを公開して、一週間市内及び近縣の小學兒童に拜觀せしめたことがあります。その時、毎日何千といふ兒童が、校長や教員につれられて参り、私どもは手分をしていろいろ説明をいたしたのであります。たしか京橋か日本橋あたりの學校と思ひますが、女

(一) 東京市京橋區。
(二) 同日本橋區。

[Ribbon]

の子で可なり綺麗な服装をして、幅の廣いリボン(一)などを着けて来た一組がありました。私はその女生徒たちに説明をしてから、皆さんは殿下さへかやうに御質素であらせられることを拜見したら、もう立派な着物だの、幅の廣いリボンなどを家庭でおねだりができないでせうね。」といつたら、感激して、大分泣いた生徒がありました。

四 今上陛下の御幼時

その二

陛下はまた非常に規律正しいことが御好きでいらせられます。朝の御起床から御拜、御食事、御通學、御復習、御運動、御入湯、御寢しんまで、實に規律正しい一日の御日課を御守

組織的

りになつて、御變更なさることはめつたにありません。随つていろいろなことをあそばすにも、すべて規律正しい計畫を立てて、組織的にあそばすといふ御性質であらせられます。

公平無私

講評

それから陛下は公平無私な御方であらせられます。例へば、戦争ごつこをなされたあとで、私はその審判をして、勝敗をきめ、講評などをする時に、御自分の方に不利なことであつても、決して御隠しなさらずに、御申出になる。角力かくりきで陛下が相手を投げられて、軍配が御自分に揚つても、行司の氣が付かなかつた少しの踏切でも御自分にあると、「これは私に踏切があつたから負であります。」と御主張

私心を挟む

批判

理路井然
大局から斷案を
下す

になる。審判官や行司が少しでも不公平な審判をすると、非常に御嫌ひになる。仲間のものが、その方が都合が好いではありませんか。などと申しますと、そんな不正直なことはいけない。と仰せになる。御判断に決して私心を挟まれない。それであるから、歴史上の事實を御批判なさる時など、實に理路井然、公明正大で、よく大局から斷案を御下しになる。實に陛下の御心は、さながら少しの曇もない明鏡であらせられます。それ故陛下の御心鏡の前に立つては、正邪善惡の姿がはつきりと寫し出されて、少しも隠すことができないのであります。

陛下は非常に御仁心が深い。どちらかと申せば御口數

一視同仁

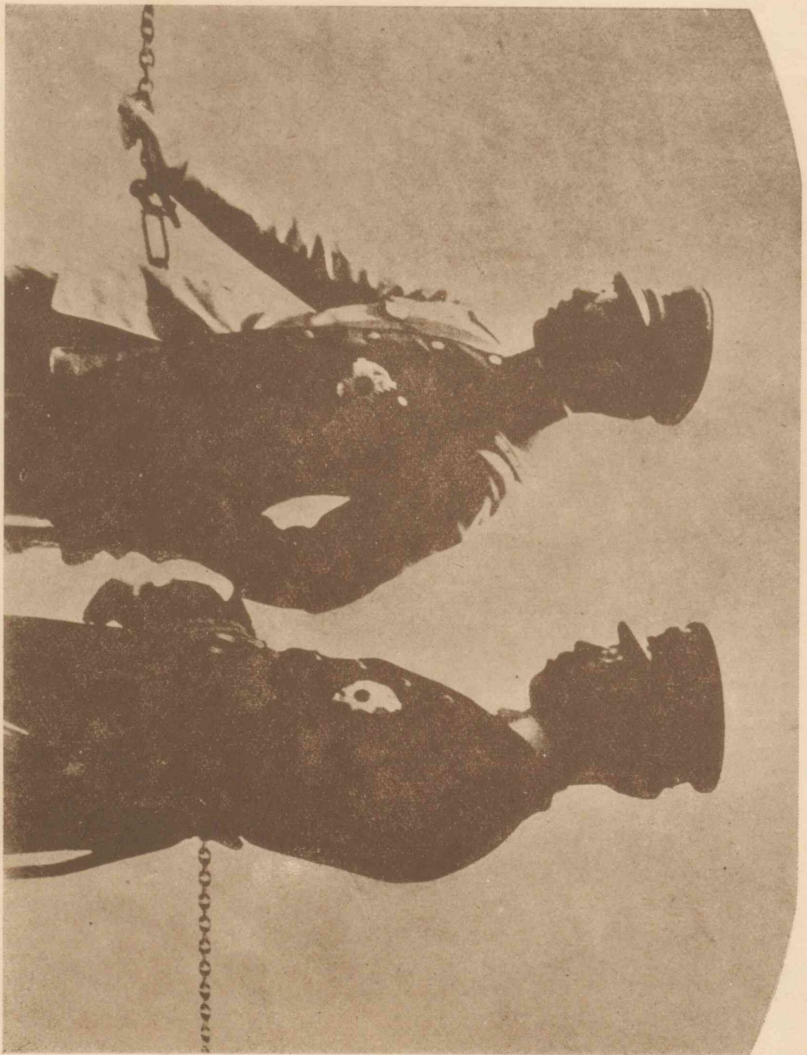
の少い方で、御世辭などは仰せられないが、まことに思遣の深い御方であらせられる。随つて御幼少の時分から、普通の子供にありがちな、友だちをいぢめるとか、意地悪いことをなさるとかいふやうなことは、決してありませんでした。そして友だちに對しても、御側のものに對しても、好き嫌ひといふことが全くなく、一視同仁で、公平に御愛しになります。侍従や侍従武官などに對しても、新舊の區別なしに、優しく御接しになるさうです。しかも舊いものをいつまでも御忘れにならずに、元の侍女だの御學友だのが御伺ひ申しますと、大變に御喜になりますし、また時の御召もあります。私どもにも無論その通りで、御誕辰

拜謁

(1) London.
(2) Paris.
陪食

荒む

やその他の御祝にはきつと御召があり、御機嫌伺に出れば御喜になつて、特別に拜謁を許され、御暇の時はいつまでも御引止めになつて、御話し下されるのであります。先年御外遊の時には、私はロンドン⁽¹⁾やパリ⁽²⁾で御迎へ申し上げましたが、屢、御召を蒙つて御陪食を賜はり、内外諸名士の前でも先生先生と仰せられるので、覺えず身の光榮に感泣した次第であります。これは實に教育者の天職に對する無上な光榮であります。人心がだんだん荒んで、師恩を忘れるどころか、全く念頭に置かないやうな學生の多い今日、陛下のなされ方は、實によい模範ではありませんか。



下陸上今るれさばとあり送見御を英渡御の下殿宮父秩

間然するところ
がない

陛下の御盛徳を稱へ奉ると、まだ澤山ありますが、要するに、陛下は御天性實に間然するところのない立派な御方で、まことに神々しい御性質を、御生れながらにしてもつていらつしやると申し奉る外はありません。

—教育研究—

昭憲皇太后御歌

光あるものともみえず大空に

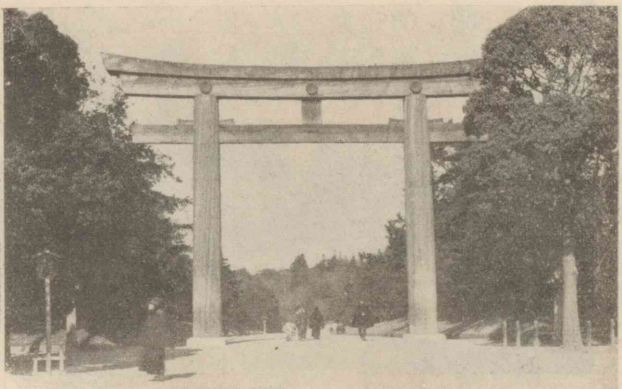
かすみはてたる春のよの月

ほそとのにたちいててみるわか影も

うつらぬはかり霞む月かな

花はみなちりにし庭にふる雨を

のとかにきゝてねふるよはかな



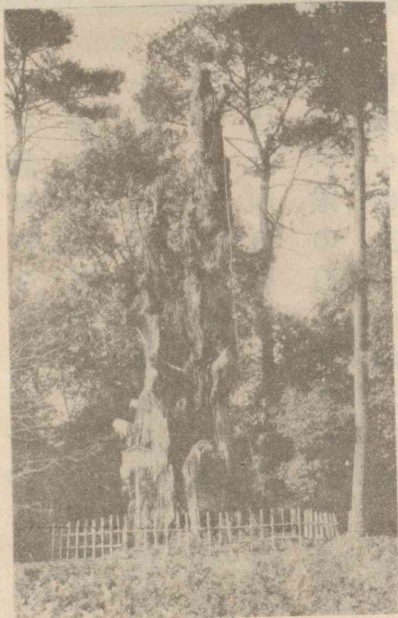
す。全部白木造の御社の背景をなしてゐる赤松の趣がまた明

たが、その折一緒に拜觀した大きな睡蓮の御池の優雅な御様子も全く忘れられません。あの幾萬本とも知れない花菖蒲の根を流れてお池にそゝいでゐた、あの澄みきつた清水がここへ落ちて來てゐるに違ひありません。
居 馬 の 一
代々木といふこの邊一帶の地名の主として記念されてゐる一本の朽ちた老木を道端に眺めてから廣い參道を左に折れますと、やがてまた右に折れるところまで参ります。そこから眞正面が神殿でございます

(一)棟の高さが三十九尺ある。

(二)建坪五十九坪あまり。棟の高さ三十五尺六寸。

治神宮特有のもので、いつ参つても優美な日本畫獨特の趣を見せて居ります。南神門の手前で小砂利の廣い道が終つて、敷石の上を歩くことになります。尋常三年生になりました秀穂はお兄さんだけに、ここで第一番に脱帽しました。女學校の二年生になりました静子が、それと氣付いてあわてて帽子を取りますと、光穂は大切なことを忘れてしまつた。と、いつたやうな顔付をして見せてから、大急ぎで新しい學帽を脱ぎました。
拜殿と南神門との間の、廻廊をめぐるした廣庭の明るさも、



木老の木々代

他の神社では決して見られない趣だと思ひます。神社の莊嚴



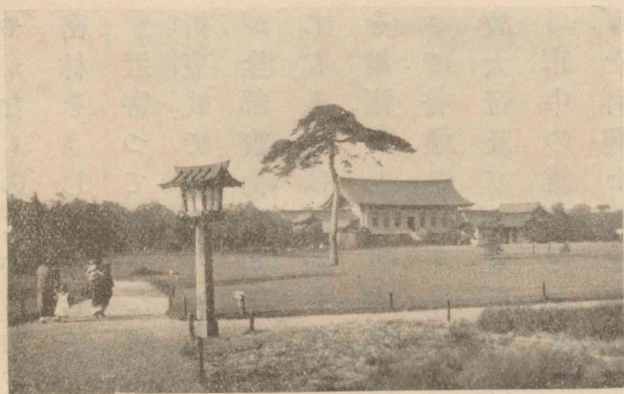
ことを私は堅く信じてゐます。

神祕
人智ではかり知
ることのできな
いこと。

靈感
神佛の不思議な
感じ。

南
神
門
白
石
進
に
ま
必
さ
れ
う
か
あ
白
石
進
に
ま
必

檜皮葺
檜の皮で屋根を
ふくこと。



う一月も経てば、ここの芝地は全部が緑の海のやうになつて、

小道を通る人々の顔や着物までが緑色に見えるやうな晴れやかなものになるのでございます。その芝地のはづれに高い密林をうしろにして御殿造の寶物殿が聳えてゐます。

近寄つて仰いだ寶物殿の造は和風六分、洋風四分ぐらゐの折衷式です。御門から正面の二階造の大きな建物の、その二階が全部寶物陳列所になつて居ります。この日、私の眼に特に映じたものは明治大帝の御机と御椅子とでありました。朱羅紗を鏡張にした黒木の御机です。普通の事務用テーブルの大きさで、普通のよりも脚が短く、低く作られて御座います。靜子は故大帝及び皇太后の御親筆を永い間拜見して居りました。市中の雑沓をよそにして、かうして靜かに御寶物のかずかずを拜觀いたして居りますと、自から心の中が澄みわたつてゆくやうに感じられます。

折衷式
彼此を取りあはせて適當なものな定めてつくつたもの。

鏡張
四方の縁を残して中を羅紗で張つたもの。
Table.

別封で寶物殿の繪葉書を一組お目にかけます。光穂の誕生日の半日を明治神宮に参拜した後、かうした建物の中で靜かに送つた私共の心持を御想像なさつていたゞきたう存じます。

寶物殿の前には石橋の架かつた細長い大きな池があります。子供等はその橋の上から緋鯉や龜に麩をあたへて遊んで居ります。私共もしばらくそこで遊んでから、近くの代々木驛に出て、電車で歸宅いたしました。一同かなりにお腹をすかせて居りましたので、お手製の赤飯も殊の外おいしくいたゞけました。

(一) 詩人。名は隆吉。明治十八年福岡縣に生まれた。詩集「邪宗門」。「思ひ出等の外」。「多くの童謡の著者」。

五 お花畑の春雨

(一) 北原白秋

いい雨が降ります。
それは絹漉のやうな細かさをもつた、明るい、落着いた
いい雨です。温かないいいお濕りです。

自然の愛み
その雨を観てみると安らかなこまごまとした自然の
愛みといふものが、とりわけて懐かしく感じられます。降
りそそぐ春雨の愛み、それは全く慈母のやうな優みをも
つた愛です。ねんごろなその雨は誰にでも何物にでも、細
かに細かに分けへだてなく降りそそいでゐます。
今朝はお向うの燻ぶつた萱屋根もしつとりと紅色を

畫趣

帯びてゐます。それだけ、その蔭の白い障子の中が紫に見
えて何となく春の田家といったやうな鄙びた畫趣を感
じさせます。しかもその前に、淡紅色の杏の花が咲いてゐ
るのです。杏の花も今は盛が過ぎて、その花の間からは青
い緑の若芽が、もういつばいに萌えだして、それにも白露
のやうな雨の玉がいつばいです。降つてゐるとも見えな
いが、霧雨がその空にも枝との間にも幽かに動いては消
えてゐます。

垣根の木槿の芽にも、露の葉にも、白い泡のやうなへん
ぺん草の花にも、はこべにも雨は降つてゐます。どの葉も
いい色をしてゐます。まるで光琳の銀泥の上に浮上つた

〔Chocolate〕

〔Brazil-coffee〕

〔Cocoa〕

庭たづみ

やうな青繪具の色です。それがみんな、十分によく濡れて
 生き生きとしてゐるので、その新しさつたらありません。
 それに土の色もいい調子に濕つてゐます。それがチョ
 コレートやブラジルコーヒーや、たまにはココアのやう
 な澁さをもつた部分部分が、どこもここもすつかり落着
 いてゐて、それに何ともいへず明るいのです。そして庭は
 かなり廣いのです。それに燃えたつたやうな梅や桃の若
 芽が反射して、あちこちの小さな庭たづみに浅い緑色の
 影を流して居ります。蜜柑も五六本別に手も入れてない
 やうですが、どれもこれも整つたいい形をしてゐます。そ
 の茂つた青黒い蜜柑の葉蔭もいいものです。その蔭にあ

すがれ

ちこちと緑の草の芽が萌えてゐます。それはあの日本の
 彩色畫家がよく筆を收める前にぼつぼつとやる、あの緑
 の點々です。そこにしつぽりと濡れた雀がおりて來ます。
 さうして小さな頭を動かしながら、ちゅつちゅつと根元
 に近づきます。
 雨はまた低い百日紅のすがれ木にも降つてゐます。つ
 るつるとしたいいい光澤、その枝々の細い梢に縋りついて
 ゐる去年の枯葉も、またなくあはれをそそります。
 雨はまた、移し植ゑた棕櫚の、新しく枯れた白茶色の裂
 葉をも明るく、却つて温かに浮立たせてゐます。
 雨はまた、細かにふるつてならしたその前の長方形の

潑刺

花壇の上にも降りそゞいでゐます。そこへ正しく植ゑつけた色々の草の芽生と露がいつぱいです。この分ならば確かについたといふ悦が、今更らしくこのいいお湿りに感謝せずにはゐられなくなります。皆生き生きとしてゐます。潑刺としてゐます。十分に濕りを吸上げて居ります。延びようとしてゐます。

植ゑつけたのは花の苗ばかりではありません。疎らな蜜柑の木のうちしろの方にも私と妻とで小さな鋏を使つて作つた小さな畑がある筈です。誰しもが、一寸見落すやうな畑も、整はぬなりに幾刻みかの畝がついてゐて、そこには淡紅色の杏の落花がいつぱいです。そこにも雀や鶴

鴿がちよいちよい來ます。さうして小さな嘴で、胡瓜や茄子や隠元豆の種をつついては、私たちをいつもはらはらさせます。

それについてこの十日ほど前、人から貰つたまゝ食べ残した青葱の幾束かも、軟かな土をかけられて、そこらの隅こに伏せられてある筈です。その青葱の先には細かな雨の白玉が凝つて、そこにも杏の花がこぼれかかつてゐさうに思はれます。何といふ清新。

雨はまた軒下のあはれな蜘蛛の巣をも水から引上げた銀の糸のやうに輝かしてゐます。芭蕉が^(一)蜂の巣つたふ雨の洩り」と詠ひましたが、それよりもなほしをらしいの

(一) 俳人。松尾芭蕉。名は宗房。元禄七年(二)三五年)歿。年五十一。
(二) 春雨や蜂の巣つたふ屋根の洩り

(一)蜘蛛の古稱。

は春雨に濡れたささがにの糸巻模様です。

雨はまた、縁側の下の圓石をもしつとりと濡らしてく
れます。その前の龍の髭の瑠璃色の玉にも、その長い細葉
の列にも、雨はまた絹漉の露をふりかけます。

(二)作者は大正五年
の頃、千葉縣下
市川町の眞間の
龜井坊といふ庵
寺に間借してゐ
た。

雨はまた、白兔の木函の荒削りの木肌にも、細かな金網
にも降りそゞいでゐます。兔といへば私は白い綿製の玩
具のやうな小さな白兔の子を、ひとつがひある人から貰
ひました。^(三)葛飾にゐた時は兔と狎^なころとを飼ひましたが、
こんどの白兔はそれは何ともいへぬかはいらしい奴で
す。露や薺や車前草の葉を金網の目から入れてやると、そ
れは喜んで噛ります。内側の薄紅い、長い白い兩耳をびよ

んと立てて、まるで齒のない嬰兒のやうに、口をもぐもぐ
させます。ともすると兩方から一枚の細い葉を取合ひつ
こをしたり、眞白いたんぼほの穂のやうに重なつたりし
て、食べてしまひます。その縁の紅い眼玉の睫毛にも銀の
小露が凝ります。その兔もまた、かうした春雨の朝には、ち
やうど私たちの子供のやうな親しさを見せてくれます。
茶の間の障子を開けて眺めてゐると、誰かしら、いいお
濕りですねと聲をかけてくれます。姿は見えないが、蛇の
目の頭が生垣の上を歩いて行くのです。謠でも習ひに行
くのでせう。

全くいいお濕りです。いい雨が降ります。 — 童心 —

(一) 詩人、畫家。明治三十一年、青葉縣に生まれた。大陽集の娘。本稿の著者がある。本書は著

六 青 葉

(一) 宮崎丈二

青葉の揺れるのを見てみると
なにかたのしい思ひに
揺られるやうだ
明るい五月の空に
軽やかな青い翼よ
風も青葉を吹くのを
喜んでゐるやうだ
終日おとづれては
戯れてゐる
光を揺りこぼしながら

魅力

青葉につままれた家々よ
見馴れた家々も
一層親み深くなつた
幸福な思ひをつゝんで
静もつてゐるやうだ
青葉の蔭の小徑よ
歩き馴れた小徑も
新しい喜び盡きない魅力を秘めて
私を誘つてゆく
どこまでも
おゝ青葉青葉

揺れ廻き
あふれる青葉
明るい五月の空に
軽やかな青い翼よ

七日の岬

渡邊霞亭

(一)小説家。名は誠。碧瑠璃園とも號した。大正十五年の死。大楠公。日蓮上人。白珊瑚の著がある。
(二)島根縣出雲の西北岸。出雲大社斗出してある。

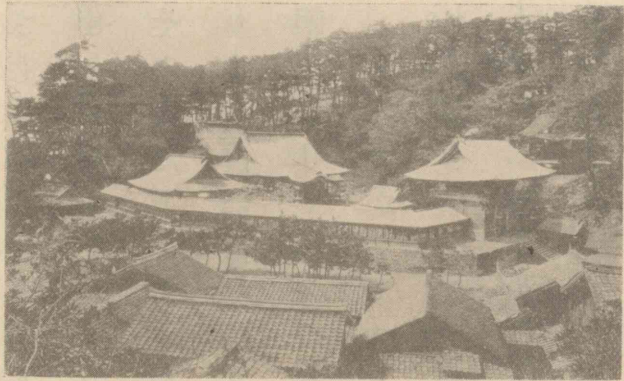
私は舊日本の風光が好きです、人間が好きです、温泉が好きです、食物が好きです。表の方では内海の景色と、それから鯛網でとれる鯛が好きですが、裏の方ではすべてが好きです。殊に山陰の風光は、出嫌ひな私に綱をつけて引張つてくれます。さして用もないのに三度までも、あのだ

さして

Tunnel.
(隧道)

(二)鳥取縣東伯郡倉吉町。

穿りも穿つたり



日御碕神社

す黒い煤煙だらけの汽車に乗りこんで、日の岬のはてまで出かけたのは、よくよくのあこがれをもつからではありませんか。私は世の中に何が一番嫌ひなといつて長いトンネルを汽車で通るほど嫌ひなことはありません。ひどい時は、大きな魔の手で胸をおさへつけられたやうな苦みも感じます。それが大阪から倉吉まで、哩數にしたら百二三十哩ほどの間に、七十六と、穿りも穿つたり、通りも通つたり、まる

さしもの

明媚

浮世の状態

感興

でトンネルばかりの間を駆けてゐるやうなものです。さしものトンネルも、山陰の道中では餘り苦痛に感じません。おや、またお出でなすつたよ。くらゐで、平氣でゐます。そのまたトンネルを出た所には、きつと明媚な風景があります。古い譬ではあるが、苦のあとは樂のある浮世の状態を見せてゐるやうで、一種の感興を催します。

その樂がちよつとの間で、また苦の世界へ進み入る。それが餘り早いので、全く頭痛を感じないわけにはまゐりませんが、そこが自分のずつと太古の先祖の故郷であると思ふと、自然に懐かしさが浮かんで來ます。乗つてゐる汽車の上にも下にも、先祖の足跡がついてゐるかと思ふ

(一)素戔嗚尊の御
子。出雲大社の
祭神。

と、一々お辭儀したくなります。私は子供の時から大國主命が好きです。大黒様といふ方は、一に俵を踏んまいて、二ににつこり笑つて。と謠はせられた時から大好きです。それは俵を踏まへてお立ちになつた御様子が、福々しくてよいからではありません。振上げた槌の中から、無數な寶が出るからでもあります。私はみづから大黒様の御家來であると信じてゐるからであります。少くとも私のずつとずつと昔の先祖は、大黒様のお靴をさげて、大黒様が裏日本を御經營なすつた時のお供をしたものであらうと思つてゐるからです。

それなら、少し福の神の御蔭を受けさうなものだと

いふ人もあるか知れませんが、私はどんなに貧乏でも、三千年前の先祖は大黒様の御家来であつたといふことを、たとひ先祖から傳はつた矢じり一つないにしろ、私の魂はちやんと承知してゐます。だからこそ出嫌ひな私が、山陰まで罷り出て、土の香をかぐのではありませんか。先祖が忠義もし、遊びもしたらうと思はれるところどころの、昔からの面影にあこがれて、そこらを駆けあるいたではありませんか。

その中で一等私の心をそゝつたのは日の岬です。

日の岬へは伊那佐の濱から小舟に乘ります。海上三里ほどもありませう。少しでも風が吹くと、危険だといつて

(一) 島根縣鏡川郡杵築町の海濱の舊名。

逗留

舟を出しませんから、運の悪い人は、二日も三日も逗留し

て、日和を待つことがあります。これ、三日くるが、一度も舟が出ない。と、泣顔して歸る人もあります。

伊那佐の濱は、少彦名命が初め

て潮に乗つて出て來られた所、武

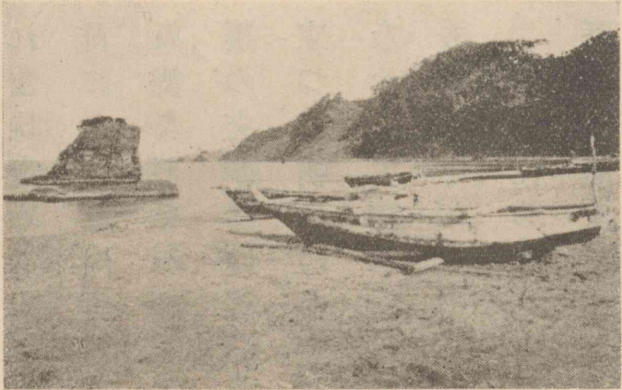
御雷神と經津主命とが、大國主命

に國讓の交渉をした所で、大黒様

には最も關係の深い土地、また日

本國民に取つては忘れることの

できぬ靈跡です。私の先祖も大國主命が國を平げて、始め



日の岬

(一) 神御産靈神の御子。大國主命を營助けた神。
(二) 經津主神と天照大神との命を受け、出雲に使者を遣はされた。大國主命から國土を受取られた。茨城縣鹿島神社。
(三) 上代の勇將。千葉縣香取神宮の祭神。

靈跡

慰勞
もだし難く

てこの濱へお出でになつて、御慰勞の酒宴をお開きなされた時、定めて大いに杯を上げたでせう。主命もだし難く、首にかけた出雲石や勾玉をかちかちといはせて、つまらぬ舞などをお目にかけましたでせうが、この二神との國讓の交渉には、どんなに心配したでせう。私はここの濱に立つて、朝日になぎわたる海の景色に接した時ほど、爽快な、そして懐かしい、そして遣るせない思を感じたことはありません。

傳説
渺茫たる

伊那佐の濱を出て日の岬へ行く間には、一つ一つ古い歴史と傳説とをもつた多くの岩が、渺茫たる波濤の間に見え隠れして、私たちを送り迎へしてくれます。中にも武

微塵にする

をどし(臧)

御雷神が、ぐづぐづいつたら、この通り微塵にするぞ。」と威して、海中へ投げられたといふ千引の岩もあります。甲のをどしを見るやうに、だんだん刻みになつた甲岩もあります。潮の色も、藻の香りも、三千年前の姿をそのままにもつてゐるかと思ふと、自然に起る感激の涙が舷にかゝります。

(一)出雲大社の東北にある出雲山の別名。

(鷗)

鼻高山(一)びを右手に見て、岩礁の間から舟路が變ると、そこに日の岬の船附場が見えます。一面の老松、その上に無數な白いかもめが舞遊び、日御碕神社の棟木が松の葉隠れに見えます。それを見ると、故郷へ歸つた時のやうな歡喜が、胸をついて出ました。向かつて右手は茂つたまゝの竹

垣で、それが右の方へ五六十間も延びてゐます。その垣は風を防ぐ爲でもあり、また波を防ぐ用にもなりませう。ところどころに四角な切穴があつて、そこから人間が入ります。

垣の中には、少くとも二三十戸の人家があるらしく、枯れて白くなつた笹葉の間から、家の棟が見えてゐます。白い炊烟が昇つてゐます。私は舟の首が岬に着いた時、三年の昔をそのまゝに見せてゐるのはここであると思ひました。ずっと前の先祖の住んだ家は、この竹垣——ではない、枯れた藪垣で圍はれた、かうした家であつたらうと思ひました。

八 朝鮮雜觀 その一

「ミカドの帝國」を書いたアメリカ人グリフィスは、朝鮮を「仙人國」と呼んだ。この仙人國も今は我が大日本の新領土となつて、一千餘萬の仙人も、皆我が新しい同胞である。仙人もだんだん俗人の仲間入をして、活動してもらはなければならなくなつたが、黒い冠を被り、白い衣を着て、悠然として市街を歩いてゐる朝鮮紳士の風采を望めば、いかにも仙人らしい様子が今でも見える。人毎に長い煙管を携へてゐるのは、仙人にはふさはしからぬやうに思はれるが、この長い煙管そのものが、優長といふ感を一層強

Griffis. 教育家。宗教家。西曆一八四三年生。明治の初年日本御展教師であつた。

優長

からしめるのである。

貴賤上下悉く純白な着物を纏うて、見わたす限り眞白なのは、全世界中恐らくは朝鮮ばかりであらう。夏だからさうなのではなく、冬でもやはり同じである。これには一つの傳説があつて、昔或時代の王様が、父王の死を悲しんで、始終白い服をつけてゐられたので、人民が皆これに倣つたのだといふ。一應聞けば尤もらしい殊勝な話であるが、この傳説は無論作事であらうと思ふ。どこの國でも古い時代には眞白な着物が流行るが、その中に、いろいろな染色や、縞や、飛白の衣裳が行はれる。文化の他の方面が種々に變化を受けたにも拘らず、純白な衣服が數千年の後

殊勝

萬事萬端
崇拜

までも行はれてゐるのは、實に不思議といはねばならぬ。萬事萬端支那を崇拜した國として、この國俗を變へなかつたことも、考へればおもしろいことである。



長衣を着た女
黄や、藍色の着物を着てゐる。それも全部同じ色で、日本の娘の子のやうに、美しい花紅

葉の染模様ではない。婦人も間々紅色、萌黄色の衣を着けてゐるが、模様や縞は少しもない。殊に婦人が「長衣」といつて、我がかつぎのやうなものを着て、目ばかり出して歩いてゐるのは、日本の古代の風

俗そのまゝで、服制に多少の相違こそあれ、大體に於て古い繪卷物を見るやうな心地がする。低い屋根の下でまきは瓜などを食べてゐる様子は、どことなく今昔物語をまのあたりに見るやうである。現在の生活に於て、朝鮮人が優長といふばかりではなく、朝鮮の歴史そのものが優長で、今でもやはりそろそろと、昔の歴史が流れてゆくのではないかと思はれる。

衣冠を正しくすることは、確かに朝鮮人の一美風であるかとも思ふ。どんな卑賤な人でも、めつたに肌を露すこととはない。これは寒い氣候の關係から、自然習慣となつた所以もあるかも知れぬが、とにかく素肌を人前には出さ

衣冠を正しくす

ない。支那の労働者も身體の上部こそ露せ、腰から下は出さないが、朝鮮人で肌を脱いでゐるのは、終に一人も見なかつた。



俗風の流上

朝鮮人は雨具を用ひぬといふことは豫て聞いて居つた。今は田舎でも蝙蝠傘を手にして歩いてゐる人を見受ける。それよりも

不思議に感じたのは、雨降の時に、冠の上に小さい傘を載せてゐることである。竹の骨に油紙を張つたものである。なるほど日本の傘はこれを大きくしたものだなど感服

した。また頭に雲水の被るやうな深笠の大きなのを被つて歩いてゐるのが往々ある。あれは何かと聞けば、喪中の人で、喪中は一年、二年、三年必ず常にあの笠を着けてゐるといふ。いかさま古い禮儀のやかましい所だ。朝鮮、支那、トルコ皆それぞれの被物を今も保存してゐる。日本人は古いものを保存してゐるが、新しいものはなんでも用ひる。洋服に下駄も履き、紋附の羽織にシルクハットも被る。



げ ち

〔Turkey.〕

〔Silk-hat.〕
(絹帽)

九 朝鮮雜觀 その二

朝鮮人のものを運ぶのは、男は背、女は頭である。男の背



女ぶ運をのも

には例の支繫しけいといふものを掛けて、一切のものをそれで運ぶ。八百屋が唐茄子や胡瓜を賣るのにも背に負うてくるので、日本のやうに、天秤棒で兩端に擔ぐことはない。すべてが山に柴刈に行く昔話の爺さん式である。女は洗濯物でもなんでも頭に載せて行くので、これ

は京都の大原女式である。しかし、大原女のやうに張板や梯子などを頭に載せて歩くのは、見受けなかつた。

朝鮮には虎がゐる。竹に虎といふから、竹も澤山ありさうに思はれるが、實際は少い。これは氣候のせいである。竹の簾や扇子や、竹細工もいくらかあるにはあるが、概して日本のやうに竹を種々な工業には使つて居らぬ。南の新領土臺灣は竹の名所で、唐竹眞二つ割で天秤棒の代りにしたり、竹で船を作つたりしてゐるが、京城では竹竿一つ見附からぬ。洗濯物を干してあるのを見ると、大抵繩にかけわたしてある。また田舎などでは、丘の上にひろげて並べてあるだけである。桶、たらひのやうなものにも、竹のた

がはない。竹のない所へ行くと、今更のやうに竹の效用の廣いのに驚かれる。水道栓の側で水を酌んでゐる朝鮮人を見ると、ブリキの石油の空函などを用ひてゐるものがあるが、瓢箪をたち割つたのが水を酌む杓子であるのは、古風でおもしろい。

朝鮮人の履物は、男も女も一種の靴であつて、内地のやうな下駄、足駄は見當らぬ。靴の下に足駄の齒のついたものは



京 城 市 街

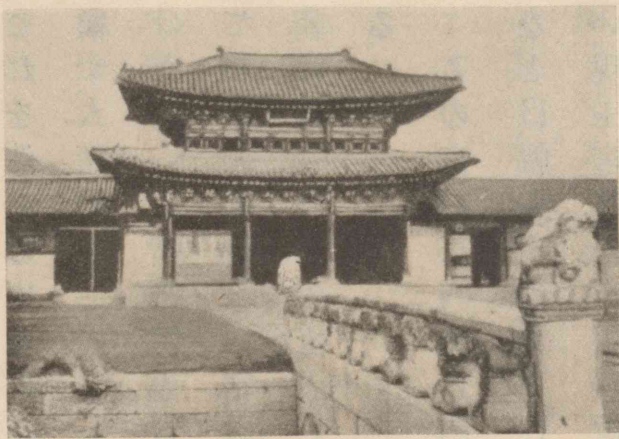
あるが、鼻緒を立てて、その鼻緒を足の指に挟んで歩くと
いふ藝當は、日本人より外にはできぬのであらう。

朝鮮の家はいかにも低くて、むさくるしく見える。京城
にはさすがに瓦ぶきの家もあるが、田舎は殆ど藁屋^{わらや}ばかり。
その藁のふき方が、日本の如く綺麗に端をそいでない
ので、たゞ藁をうち掛けたやうに見える。寒さを恐れる爲
窓が少いから陰氣で、日本の田舎家のやうにからりとし
て居らぬ。日本のは小さくても、汚くても、からりとおつ開
いてゐる。あれでは夏はさぞ暑からうといへば、日が透ら
ぬから割合に涼しいとのこと。床は土で、その下が温突^{をんさつ}で、
冬は火を焚いて暖めるのである。元來朝鮮では、庶民には

(葦)

庶民

(一)朝鮮李太王生父
李昪^{イヒ}の尊稱。



景福宮

二階建、三階建を禁じたのである。それ故庶民の家は皆低
い。また家を餘り立派にすれば、
金持と認められてすぐに課税
されるから、金持でもわざと外
觀を汚くしてゐたやうな原因
もあらう。併合後新築する朝鮮
人の家には、だんだんと二階造
の高いのもできるさうである。
それに比べれば、王宮は比較
にならぬほど規模も大きいし、
立派である。就中さきの王宮景福宮は大院君の造營され

膏血を絞る

(崇)

た宮殿で、幾多の宮殿樓閣が相連なつて、廣いものである。これを造る爲には、民の疾苦をも顧ず、人頭税までも課して作り上げたといふ。所謂民の膏血を絞つて築いたので、この宮殿が即ち李朝にたゞつたのだといはれてゐる。

この宮の正門光化門前の通りなどは、幅六十間、東京にも全くない。現王宮昌徳宮も拜觀したが、これは近世の洋風に塗替へ、西洋の椅子、ソファーなどがある。



光化門

[Sota]

丹碧を塗る

林泉の美

つて、面目が改つてゐる。しかし、總じて建築には丹碧を塗附けてあるばかりで、材木の削方、仕上方は、日本のやうに立派でない。一體樹木の少い京城に、昌徳宮の裏の祕苑だけは、さすがに老樹が生茂つてゐる。しかし、なん等林泉の美としてはない。小さい溪流の石に題した句に、「飛流三百尺、遙落九天來」とあるのには驚いた。

朝鮮人は怠惰で労働を嫌ふといふが、農業に精を出して働いてゐるのを見ても、決してなまけるばかりの人間ではない。朝鮮の山を禿山にしたのも、長煙管をくはへて悠然として南山を見てゐる白衣の民を作つたのも、皆古來の悪政の罪である。苛政は眞に虎よりも猛である。我が

(一)この句は禮記の中にある。苛政

德澤

一千萬の新同胞は、今や仙人の生活を次第にはなれて、嬉
嬉として我が聖天子の德澤にうるほひつゝあるのであ
る。

明治天皇御製

をさめしる國のはてまでしらせはや

民やすかれとおもふこゝろを

照るにつけ曇るにつけて思ふかな

わが民草のうへはいかにと

民草

(一) 佛文學者。早稲
田大學教授。野明
治十五年長野縣
に生まれた。青
空。霧の旅。輝
く海等の著の他
翻譯物が多い。

(二) Marcouier.
(標)

(三) 鳩の一種。

(四) Africa.

一〇 パリの若葉

(一) 吉江喬松

パリの美しいのは、春の末、夏の初です。

(二) マロニエといふ、日本ならばとちのやうな木が、パリの

町々の兩側に立並んでゐて、その若葉が青く光つて、こん

もりと茂りだしてくると、その中から珠數掛鳩(三)のほうほ

ういふ聲が聞えだします。すると、その茂つた葉の間から、

白や赤の蠟燭のやうな形をした花が、大きく一面に咲き

だすのです。

パリ全體がこの若葉と花とに包まれる頃になると、日

本にはゐない、そして、日本のよりは一層大きな燕が、ア(四)フ

リカの方から飛んで来て、パリの舊い大きなお寺の塔の上に巢を造ります。この燕は羽が大きく、脚が小さいので、いつも空を飛んでゐるか、高い塔の頂いたゞきや木の上に止つてゐるかだけで、地の上におりることはできません。地上におりると、羽がつかへて歩けないのです。夕方の空が牡丹色に染まつて、空気が柔かで、なんともいへない氣持になる中を、この大燕がゆつたり飛んでゐるのを見ると、いかにも違つた國に来てゐる心持がします。その時、寺々の高い鐘樓しゆろうからはれやかな澄んだ鐘の音が響きます。この鐘の音が空で響き合はせ、パリ全體へ夕方の休を告知らせるのです。この鐘の音を聞いた時は、人

搖籃

人は仕事の手を休めて、家路へ歸るしたくをするのです。野で働いてゐる人々は鋤の手をやめて、夕方のお祈をします。日曜日だと、この鐘の音が、寺々によつて、それぞれの音樂の曲を打鳴らすので、空中全體が華やかな合奏がっさう場のやうになります。生れつき音樂好きの小兒は、搖籃ゆりかごに入れられてゐる時からこの寺の鐘の音が奏する音樂で、思はず手足を搖動かすといふことです。

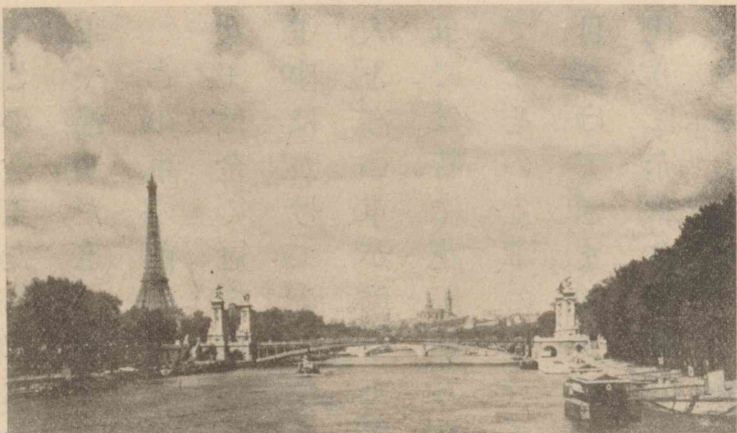


(筆-レミ) 祈のべふゆ

このパリ全市を埋めるマロニエの若葉の下を、眞白な姿をした、白い紗しよの布を頭からうしろへ長く垂れた靴までも白い十二三の少女たちが、両親や兄弟たちにつれられて、幾人も幾人も通つて行きます。私はパリに着いたばかりの頃、それが花嫁姿かと思つて、小さい花嫁が幾人も一時にできたものだと思つて、人にきいて笑はれたことがあります。これは始めて(一)キリストの教を受けて、そのおゆるしが出たしるしに、汚れない純白な姿をして、キリストの前に立つのです。涼しい朝風に眞白な紗を吹かせながら、若葉の下を通つて行くこの女の子の姿は、白い蝶々が舞つて行くやうです。

Christ.

練歩く



パリス(セイス河)

その頃パリにはちやうど女王の祭があります。一種の花祭といつてもよいのでせう。パリ中の若い美人を選び出して、立派な王様の車に載せて、パリの町を練歩ねりあくのです。第一の女王を選び、それからつづいて幾人ものフランスの町々の女王を選び、それをいくつかの緋や赤や紫の幕で、鉦かねや旗で飾りたてた王様の金の車に載せるので

分乗

す。この女王たちには、それぞれの従者がついてゐて、同じ車や、違つた車に分乗して、ついて行きます。

玉座

満載

この車の前後に樂隊がついて、賑やかにはやして行く。女王は金の冠を戴いて、背後には眞紅な長い裾をひいて、玉座にかけてゐます。一段下には四人。更にその下には八人と、高い車が飾りたてた人を満載してゐるのです。この車には特に花が飾られて、人は花の中に埋つてゐるやうです。その上、車の通つて行く町々では、兩側からその車を目がけて、さまざまな花を投げかけます。また町では、花の代りに、赤や白の紙の細かに切つたのを、誰でも通りがかりの人々の頭から、背中せなかから投げかける。これを浴あびせか

大統領

けられても、誰一人怒るものなどはありません。みんな愉快さうに笑つて、通つて行きます。

女王の車は、人の中を、また花の中を押分けて、幾臺も通る。そしてパリの市の主な場所をめぐつてから、やがて大統領の官宅へ集るのです。ここでは、大統領夫妻がみづから階段まで出て来て、名譽あるパリの市の花の女王に、花束を授けます。この日は、パリ全市が美しい花の祭の日になるのです。

五月一日には、また人々が必ず（一）ミュゲの花を胸につけます。鈴蘭の花です。日本では北海道に多く咲く匂の高い草花です。これは縁喜がよいといふので、町々の角かどなどで

Muguet.
鈴蘭とも、きみ
かけ草とも、ま
た谷間のひめゆ
りともいふ。

(一)寺院で行ふ佛事のよりあひひ蓮宗では十月三日、日蓮上人の忌日に修める法會上の東京市化された東市外荏原郡池上にも盛んである。

きほひ

はりあふこと。

鳳凰の翼
御神輿の上の飾りである。

頃でも曇るのであらう。また、大通りの絹張の繪行燈、横町横町の軒提燈も、祭禮の夜は闇の方がいかにもふさはしい。紅提燈は涼しく、萬燈は霜の御會式を思はせる。日中の暑さに、汗は流れる血は煮える。御神輿かつぎは人のきほひが物凄い。
五十人、八十人、百何人、ひとかたまりの若い衆の顔は、目が据り、色は血走り、唇は青くなつて、前向、横向、後ろ向、一つに押合つて、葡萄の房に一粒づつ目、口、鼻を描いたやうで、手足の筋は凌霄花の緋を欺く。御神輿の柱の飾の珊瑚がばつと咲き、銀の鈴が鳴りわたつて、鳳凰の翼や、とさかがさつと汗ばむと、彼方此方に揉む揉む、揉まれる御神輿は、團扇の風、手の波にゆらゆらと乗つては揺れ、すらりと大地を斜に流れたかとすれば、千本の腕の帆柱に、つと軒の上へまつすぐに舞上る。
わつしよ、わつしよ、わつしよ、わつしよ、わつしよ。

もうこんな時には、人が御神輿を擔ぐのではなくて、御神輿の方がいます。靈とともに、人の波を思ふまゝに釣るのである。御神輿は行きたい方へ行き、巡りたい方へ巡る。殆ど人間業ではない。



「提燈の張替をお出し

置き下さい。」へい、いたゞ

きに出ました。」え、張替

祭をお届け申します。」軒の

花を懸けます。」と、入れか

はり立ちかはり人の出

入り。二三日前から、もう町内は親類づきあひ。それもよい。てけてん、てけてん、はや獅子が舞歩く。

御神輿、囃子、踊屋臺、町々の山車の飾、つくりもの人形、活花、造

山車
祭禮の時に山や人形などの形をなすにつけてひく車。

(一) 劇作家。名は敬

二。明治五年東京に生まれた。七捕物帳本集。半隨筆物の著がある。

(二) London.

イギリスの首都。人口七四八

(三) 大正八年。

(四) Hyde Park.

ロンドンの西部の公園。

講和條約調印 (逆)

一一 ロンドンの一夜

岡本綺堂

六月二十八日の午後六時、^(三)ハイド・パークの椅子によりながら、講和條約調印の號砲を聞いた。號砲は池のほとりで一發また一發とつづけて打出されるので、黄色い烟が青い木立の間をほとばしり出て、曇つた空の下に低く消えてゆくのが、眼の前に見える。一隊毎に思ひ思ひの制服を着けた少年軍が、太鼓をたゞき、喇叭を吹きながら、足並をそろへて、公園へ續々と繰りこんでくる。今にも降りだし、さうな暗い大空の下にも、一種の喜の色が漂つて來たが、そこらに群がつてゐる人たちは、さのみに動かない。講

既定の事實

(一) Table.

(食卓)

克復

(二) Oxford-circus.

(三) Piccadilly-circus.

和條約の調印——それは既定の事實だといふやうな顔をして、みんな冷やかに沈黙してゐるらしくも見えた。これが代表的英國人といふのかも知れないと私は思つた。^(一)宿へ歸ると、晚餐のテーブルに珍しく日本酒が出てゐる。いよいよ平和克復の祝意を表すのだといつて、ふだんは無口の主婦も、今夜はさすがににこにこしてゐる。私たちも無論祝意を表して、更に夜の市中の光景を観るべく、まづ^(二)オックスフォード・サーカスの大通りに出た。出て見ると、晝と夜とはまるで世間の有様が變つてゐる。どこから集つて來たか知らないが、無数の人間が三方から眞黒に押寄せて來て、一方の^(三)ピカデリー・サーカスの方角へ

無意識

〔Trafalgar-square〕

平押しに押しに行く。私たちもその渦の中に呑みこまれて、殆ど無意識に同じ方面へ押されて行つた。

夕刊の新聞記事によると、今夜の賑はひの中心はトラファルガー・スクエアーで、そこで花火が揚るといふ。群集の潮もその方面へ向かつて流れて行くらしい。さう思ひながら、押されるまゝに進んで行くと、路傍のホテルや料理店の二階三階から、色紙がむやみに投げられるので、紅白の細かい紙の雪は、群集の帽子や肩の上一面に降りかゝつてくる。もうかうなると、代表的英國人も何もあつたものではない。沈着と謹慎とを賣物にしてゐる英國人も、今夜は明つ放しの無禮講である。喉が破裂しさうな大

無禮講

〔Hotel〕

(等)

聲をあげて、歌ふものがある。わけもなしにわつわつとどなるものがある。旗を振つて歩くものがある。一種の小さい毛ばうきのやうなものを持つて、誰でも構はずに顔をなで廻して行くものがある。

〔Viscount Horatio Nelson〕
イギリスの有名な水師提督
(西暦一七五八年—一八〇五年)

私たちは半分夢中で、目的地のトラファルガー・スクエアーまで押されて行くと、かのネルソン將軍の(一)高い塔には、夥しい国旗が懸けられてゐる。塔の下の空地で花火がうち揚げられるのであるが、とてもその傍へは寄りつけないので、どんな仕掛花火かよくはわからない。たゞ時々高く揚る紅や青や紫の星の光が、亂れて流れるのを仰ぎ視るばかりである。その花火の光を奪ふやうに、どこか



城宮ムガンキッパ

らか探照燈がひらひらと閃いて来て眞黒に渦巻いてゐる人々の帽子や顔を蒼白く照らして通る。それが通り過ぎると、暗い空は再び花火の美しい星に彩られる。空ばかりでなく、地の上も時々眞紅にやけたり、眞青に光つたりするらしいが、人の垣に隔てられて、のぞくこともできない。ここを立退いて、少し混雜が薄れるかと思ふと、往來の眞中に輪を作つて、幾組も踊つてゐるのがあつた。踊りながら歩いて

ゐるのもある。自分勝手に花火をぼんぼんうち揚げてゐるのもある。鼠花火のやうなものを人の足下へ投付けて、その火に驚いて飛上るのを喜んでゐるものもある。巡査は笑つて見てゐて、今夜は決して叱らうとはしない。

群集は私たちと前後して、暗い木立の下を縫つて行く。バッキンガムの宮城前へ集るのである。宮城前の廣場には、もう幾萬人か屯してゐる。

「キング・キング。」と叫びながら驅けて行くものがある。私たちもそのあとに附いて驅けて行くと、露臺には燈火が燦として輝いて、英國皇帝陛下も皇后陛下も、そこに正しく立つてゐられるのが、夜目にも仰がれる。陛下からどう

① Buckingham.
英國皇帝の平生
住まはれる所

屯す

② King.

燦として

會釋

(1) Stick.
(2) Handkerchief.

いふ御會釋のお詞があつたか、遠方からは勿論聴取れなかつたが、幾萬の群集はどつと聲をあげて、帽を振るものもある、ステッキヤ⁽¹⁾やハンカチーフ⁽²⁾を振るものもある。陛下のお姿が窓に隠れて、露臺が闇に包まれた後も、宮城の森に反響する歡呼の聲は、暫くやまなかつた。

歸りはなるべく混雜の少い拔道を擇んでも、とのオックスフォード・サーカスマで歸り着くと、夜風の寒いのが始めて肌^くに浸みた。暗い雲はだんだんにちぎれかゝつて、その袖の下から白い星が二つ三つ、瞬きもせず、に下界を視つめてゐるらしかつた。宿へ歸つて時計を見ると、今夜はもう十二時を過ぎてゐた。

— 十番隨筆 —

(一) 詩人。畫家。明治二十年。東京。一。年。東。明。集。に。生。ま。れ。た。花。の。外。話。に。温。室。の。路。花。等。の。著。が。ある。灌。木。 (畦)

一二 慈 愛

(一) 川 路 柳 虹

青草が息をしてゐるやうなあぜ道^{みち}
ちよいとした灌木^{くわんぼく}の木かげに
投捨てた草の籠。
その中にあかんぼが眠^ねてゐる。

土まみれの母は、麥の中から
顔を出しては、あかんぼを眺めた。
そのまぶかな微笑が
うつくしい日に光る。

遠くを走る汽車のとゞろきが一しきり、

まどかな

一しきり

やがて向うへ消えると、空には雲雀の歌。
麥の波が時をり百姓の姿を隠すけれど、
あかんぼは眠りながら、
この圓滿な光を自由に吸つてゐる。

一三 ベートーヴェンの話 (一) 牛山 充

あなた方は大抵「月光奏鳴曲」をお聞きになつたでせう。
中にはこの曲の由來について傳説めいた靴屋の盲目娘
の物語をお讀みになつた方があるかもしれせん。いふ
までもなく、これは架空の物語で、事實に基いたものでは
ありませんが、この曲を書いたベートーヴェンが、極めて

(一) 音楽評論家。東京朝日新聞記者。長野縣に生れた。野田の著書「音楽の歴史」の著者。著書「音楽の歴史」の著者。著書「音楽の歴史」の著者。

(二) Ludwig van Beethoven. ドイツの作曲家。西暦一七七〇年十一月一八二七年。

架空の物語

同情心に富んだ、温い心の人で、氣の毒な人たちの爲にいろいろと慈善的な仕事をやつたからこそ、あのやうな美しい物語が生まれ、遂には多くの人々に、實話として信じられるやうになつたのです。

ベートーヴェンは十八世紀の生んだ屈指の人傑で、同じ時代の英雄ウエリントン(一)はいふまでもなく、ナポレオンよりも偉大であるとさへいはれる人です。随つて音楽家の中では空前絶後の樂聖であらうと考へられてゐます。では何故さうであるか、その譯を少しお話致しませう。ベートーヴェンは七人兄弟の二番目として生まれたのですが、男では長男でした。父はボン(二)の選舉侯に仕へて

(一) Arthur Wellington.

(二) Bonn. ドイツの都府。ライン河畔にある。

(三) Bonn. ドイツの都府。ライン河畔にある。

〔Tennor

ゐたテナー歌者で、酒癖が悪く、僅かばかりの収入は悉く酒の爲に浪費して、家を顧みませんでしたので、病弱で、やさしい母の心労は非常なものでした。ベートーヴェンは十一の時から劇場に出て働き、母を助けて弟妹の世話をしました。十七歳の時母は病の爲に長逝したので、家長の代りとなつて一家の爲に小さい胸を痛めなければなりませんでした。

雄飛

生れ故郷のボンは片田舎の町で、將來雄飛すべき天才の永く止るべき所ではありません。大いに仕事をしようとする者はどうしてもヴヰーンへ出なければなりませんでした。ベートーヴェンも意を決して二人の弟を伴つ

〔Wien,
ダニエーア河畔
にある。オース
トリアの首府。

〔J. Nohl.

てこの都に上り、父母に代つて親切に愛育しました。母に對して至孝、弟に對して至友であつたベートーヴェンが朋友に對しても終生渝らない宜を保つたことはいふまでもありません。ノールが編纂したベートーヴェンの書簡集を繙く人は、臨終に於てもなほボン時代の舊友ベエーゲラー夫妻などに對して、溢れるばかりの友愛をもつてゐたことを知るであります。人は成功すると、自分一人の利益を圖るのが普通ですが、ベートーヴェンは世に出る抑もの初めから慈善音樂會の出演で、成功の頂上に立つても絶えず貧しい人々の爲に力を盡くすのを喜としました。一八〇一年にヴヰーン

ンからボンの舊友ベエーゲラーの許に寄せた手紙には次のやうなことが記されてゐます。

「……まあここに困つてゐる友人があるとする。ところで私の財布が直ぐこの友人を助けることができな合には、一寸自分の机に向かひさへすればよいのです。さうすると、瞬く間にその困窮を救つてやることができます。……これができるといふことは何たる喜でせう……私の藝術は貧しい人々を救ふ以外の目的に獻ぜられてゐるものではありません。」

一八一二年^(一)グラーツで慈善音樂會が開かれ、ベートーヴェンにも應分の助力が求められたのですが、生憎送る

[Graz. ヴキーンの西南一四〇哩。

[Baden. ドイツの西南フランスとの國境。
正視
[Karlsbad. ボヘミア州の都。温泉地で名高。

べき、金がなかつたので、他の原稿に添へて「檻欖山」と合唱幻想曲の樂譜を送り、何といつても代價を受取らうとはしませんでした。それから間もなくバーデンの大火で罹災者の慘狀を正視するに忍びず、みづから率先して^(二)カルルスバードで盛んな慈善音樂會を開きました。すでに友人に對し、また苦しんでゐる同胞に對し、溢れるばかりの同情をもつてゐたベートーヴェンが、祖國に對して無關心でゐた筈はありません。一八一三年の秋^(三)ヴェットリアの役の敗報が傳へられるや、ハナウで負傷したオーストリーとバイエルン^(四)の兵士たちの爲に音樂會を指揮しました。この時はたゞ指揮者として立つたばかり

[Hanau.
[Bayern.

[Orchestra.
(管絃樂)]

りでなく、なほ特に「ウェリントンの捷利、別名ヴェクトリアの役」を作曲しました。この時は、當時知名の音楽家が十數名もオーケストラの中に加はつて演奏したので音楽史上でも名高いものですが、ベートーヴェンは「作品が自分のものであつたから指揮者となつたので、若し他人の作であつたならば喜んで大太鼓でも何でも引受けるところであつた。我々の頭には、たゞ祖國に盡くしたいとの一念があるだけで、誰一人としてお互の地位や伎倆の上を考へてゐる者はなかつた」と書いて居ります。ベートーヴェンはヴァイオリンも達者でしたが、ピアノは殊に名手の域に達してゐました。初めヴェーモンへ出

[Zenny.
ツェーニのソア
ニスト。
(西曆一七九一
年一八五七
年)
權門

風靡

た頃は主としてこの演奏で立ち、また多くの弟子を教へて生活してゐました。弟子に對してもよい先生であつたのですが、殊にツェルニーには非常に親切にして、美談さへ残つてゐるくらゐであります。しかし、權門富貴に媚びることは大嫌ひでした。それにもかゝらず、王侯貴族が争つてこの樂聖を迎へたのは、全くその不世出の天才と、至純な人となりとに心服してゐたからであります。一時イタリア音楽熱がこの都を風靡し、堅實な音楽が顧られなかつたことがあります。ベートーヴェンは時運の非なるを見、苦心の大作を携へて他國に去らうとしま

した。これを傳へ聞いたヴァキーンの貴族や出版業者は非常に驚き、連名してこれを思ひ止ることを請ひ、一定の年金を支出することを申し出たくらゐです。彼等はこの樂聖を國の寶であると考へ、またこれを言葉にしてゐます。かくまで世の尊重するところとなつたのであるから、さぞ幸福であつたらうとは誰しも考へるところですが、事實は正に反對で、壯年時代から聾耳の徵候が現れ、醫者の不熟練の爲、遂に不治の病となつて全く聽覺を失ふに至つたのですが、これを人に知られることを恐れたので、その苦惱は非常なものでした。この間の消息は知人に宛てた書簡によつて明らかですが、何人も涙なしにこれを

讀むことはできないくらゐです。

大抵の人はこの爲に粉碎されて、創作をつづけることは到底できなかつたでせう。けれども打撃が強ければ強いほど反撥して起ちあがりました。運命の殘酷な鐵槌は幾度もベートーヴェンを打倒したやうに見えました。しかしその度毎に猛然と奮ひ起つて、次から次へと大作を投出したのであります。

あなた方はシルレルの「歡喜の頌」に作曲した合唱のついでに第九交響曲と「莊嚴彌撒」を聞かれたでせう。この二曲はいづれも空前の最大傑作と稱せられるものですが、これ等を初め、樂聖の名を不朽ならしめる作品は、悉

反撥

Friedrich von
Schiller.
ドイツの劇作家。詩人。(西曆一七五九年—一八〇五年)

く耳の疾患にかゝつてから、絶大な苦惱と戦ひつゝ書上げたものであります。

よくいはれることですが、音を生命とするので、人一倍完全な聴覚を必要とする音楽家が、全くこれを失つて、しかもよく、この偉業を成就し得たことは古今東西の歴史にその比を見ない驚歎事であります。素より生れつきの樂才がなくてはでき得べきことではありませんが、その上に不屈不撓の精神と、不退轉の勇氣があつたからこそこれができたのです。

百萬の敵を征服することも容易ではありません。しかし、一人さびしく自己の執拗な運命と戦ひつづけて遂に

不退轉

執拗

同日の談ではな

これを克服し、全人類の喜となり、誇となるべき作品を生みだした捷利に比べたならば、難易の懸隔は同日の談ではないのであります。

ナポレオンの最大なる捷利も、その當時こそ一世を震撼せしむるに足る威力と華やかさをもつて輝いたでせうが、これをベートーヴェンの收めた超人的の戦捷が、年を閱するに随つて益々光輝を加へるに比較することはできないのです。

この偉大な魂が天に去つてから百年は夢の如く流れました。その傳記はあらゆる方面から精査し盡くされたにも拘らず、操行上一つの非難すべき點も見出されませ

超人的の戦捷

ん。その生涯の足跡を辿り、その人となりを明らかにすればするほどその作品が強く人心を動かす所以が明瞭になつて來ます。自分を棄てて全人類の爲に、それも未來のよりよき人類の爲に、自己の藝術を通じて盡くさうとした獻身が、あの偉業を成就せしめたのです。

あなた方の中には多分ピアノを學んで居られる方があるでせう。若しツェルニーの練習曲を勉強しておいでならば、あなた方はベートーヴェンの孫弟子となつたのです。もしツェルニーは卒業してこの樂聖の手になつたピアノの奏鳴曲を學んで居られるならば、或意味に於て、直接にこの大家の教を受けてゐるといふことができま

す。たとへ自身ではこれを弾かないでも、その作品の演奏に接して心からの感動を覺えたならば、すでにこの樂聖と靈交を結び得たのであります。

野に出でて

百田宗治

野に出でて歌はまし、

曉の野に出でて歌はまし、

めざめたる草の花とともに。

曉を知る水の流とともに。

あはれ、輝きいづる太陽をことほぐ爲に、

野に出でてうたはまし。

(一) 詩人。明治二十六年大阪に生
まれ。新詩集、
青い翼、外、小
風車等の童話
等、評論、童話
等に筆を執つて
ゐる。

一四 汝の母より

姉崎正治^(一)

(一) 宗教哲學者。文學博士。東京帝國大學教授。明治六年京都復活の曙光。停雲集の著者。

(二) Britain.

(三) Deutschland.

塹壕

飛翔

ものあはれ

(四) Pocket.

一葉

世界大戰に於て、イギリスの一飛行士官が、敵たるドイツの飛行機を射落した時のことである。彼は敵機の地に落ちるのを見ると共に、それに乗組んでゐる敵兵のことを思ひ、敵の塹壕前ながら、敵機の跡を追うて着陸した。敵機は翼を折つて破れ、乗組士官の體は地に横たはつて、呼吸はすでに絶えてゐた。敵ながら今まで空中に飛翔してゐた人のことを思ひ、ものあはれを覺えて、その死體を片付けてやらうと、胸のポケットのあたりにさはると、そこに一つ堅いものがあつた。これを搜り出して見ると、一

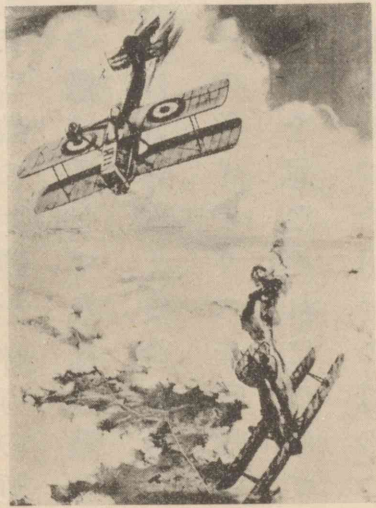
葉の寫眞で、それには女の手で「汝の母」と書いてある。即ち今戰死した士官は、空中戦にも常にポケットに母の寫眞を藏してゐたのを見て、その士官は一層のあはれに堪へず、まづ敵の死體を身方の塹壕にもたらし、然る後再び自分の機に乗じて、なほ一戦した。その日の戦にも、イギリス士官は武運強く、安全に身方の戦線の後に歸つた。

その後イギリス士官は、この射殺した敵とその老母とすることを思ひ、それにつけても自分の身の上、且つは早くに亡くなつた自分の母のことを考へ、感慨に堪へず、敵士官の姓名をたどつて、彼が母へ一書を送つた。その書面は次の通りである。

感慨

武運強し

残忍



空中戦の光景

まで母御の寫眞を大切に
ポケットに藏してゐたの
を發見し、その母御たるあ
なたにこの手紙を差出し
ます。

私はあなたの御子息を殺
しました。しかし、その人を憎んだのでもなければ、その
人の母御たるあなたのお悲みを知らないはずもない
のです。たゞ戦争といふ残忍な仕事に於て、これは私の

偵察

敬意を表す

無量の感に打た
れる

いとし

義務でした。敵士官即ちあなたの御子息が、身方の陣地
を空中から偵察して無事に歸られたなら、その結果、身
方は反對に攻撃を受けて、幾人かの兵は、その爲に命を
失つたでせう。この不幸を防ぐ爲に、私は敵機を射落し
ましたが、その乗組士官の身體に敬意を表し、それを片
附けようとする時に、その人の母御たるあなたの寫眞
を發見して、無量の感に打たれたのです。
私は子供の時に母を喪ひ、今でも人に母親があるのを
見て、羨ましく思ふのですが、私の殺した敵士官には、あ
なたといふいとしの母親があり、死ぬまでその寫眞を
抱いてゐられたのを見ては、自分はじつとしてほら

れません。殺した私の手紙を見ては口惜しくも思はれませうが、私としては、かの人の母御に對して恰も自分の母に對するやうな親しい感じを、悲みの中にも禁じ得ません。

私がかの人を殺したのは、戦争といふ残忍な悪魔のしたことです。あなたも、また亡くなつたあなたの御子息も、このことを思うて、私の殺人を赦して下さるでせう。さうしてまた、かの人の亡くなつた代りに、私に一人の母を得たやうな思のあるのを察して下さるでせう。今私の書くこの手紙は、かの人と私と二人の魂が、一緒になつて書くのだと思つて下さい。もうこれ以上には書

中立國

けません。涙で眼は曇り、筆を執る手も震へて書けませ

ん。
この手紙はイギリス軍の本營から中立國の手を経て、ドイツ國內の宛名の人に届いた。一人の兒を喪つた母がこれを讀んだ時の感は、思ふも涙の種である。さうしてこの婦人は、數日の後長い手紙を書いて、かのイギリス士官へ送つた。その大意は次の通りであつた。

「御手紙の着く前に、子供の戦死は知つて居りましたが、



躍活の機行飛

述懐
蘇生

その戦死の相手たるあなたの情深い御手紙を見た時の私の思は御察し下さい。通常ならあなたを子供の仇といふところですが、御述懐に接しては、その仇が反つて子供の蘇生となつて、この母に手紙を寄せてくれたやうに思はれます。あなたが子供の懐にあつた私の寫眞に對して、亡き母御に對する心持がするといはれるやうに、あなたの御手紙は、私にとつては、戦死した子供の手紙としか思はれません。あなたは子供を殺したといはれ、また事實その通りに違ひないことは知つてゐますが、殺すも殺されるも、共に各の國の爲で、人としてなん等怨のあるわけでないのは、お互に明白なことで

畢竟

せう。その怨もないものが互に殺さうとするのは、畢竟戦争の爲ですが、これについては、私は何も申しません。たゞ仇といふべきあなたが私を母のやうに思ひ、私もまたあなたが死んだ子供の身代りのやうに思はれるのは、何たる不思議なこととせう。私には三人の男の子があり、戦死したのはその末子ですが、兄二人もやはり戦線に出てゐて、いつ弟と同じ運命になるとも計られません。しかし、私は末子の戦死した爲に、あなたといふ新たな子を得ました。戦争が済み平和の時が來、さうして兄二人も無事に歸ることがあれば、私はあなたにもこの家へ一度來て頂きたいと思ひます。二人の兄もあ

なたを弟と思つて迎へるでせう。その時には、あなたは、死んだ子供とあなたと二人分の子として弟として、私の家庭にいつまでも滞在して頂きたい。その日の早くくることを神に祈ります。」

さうして最後には、「汝の母」と、かの寫眞に書いてある通りに書いてあつた。

この事實だけで十分である。一々註釋を要しない。人情の美は、眞心によつてかくの如く結び附くのである。

— 光あれ —

註釋

一五 鳥の愛情

(一) 人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふとは、……千里を行くも親心、子を忘れぬと聞くものを

「げにや、人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふとは、……千里を行くも親心、子を忘れぬと聞くものを」

これは謠曲「隅田川」の一節で、京の北白河に住んでゐた一人の女が、さらはれて行つた一人子の行方を尋ねながら、心も狂うて、隅田川のほとりまでもさまようて來た哀話を、謠つたものである。親の愛情を思ふ時、私はいつもこの謠曲を思ふ。

「千里を行くも親心。子供の爲には命を捨てても顧ない

謠曲

(二) 荒川の下流、東京市の東部を貫いて、東京灣に入る。

獸類

澤山

無關心

(鱈)

親の愛情は、げに尊いものである。その親の愛情を思ふと、子供はどんなにしても、親に孝行を盡くさねばならない。それならば親子の愛情は、ひとり人間にだけ限られてゐるかといふと、決してさうではない。鳥類や獸類の中にも、親が子を愛し、また子が親を思ふものは澤山ある。一羽の小鳥でさへ、子供の爲には、命までも捨てるのがある。もつとも一方には、子供に對しては、殆ど無關心なものもないではない。中にも魚類は、その多くは卵を産むだけで、その後のことに就いては、少しも顧てやらない。つまり子に對しては、何等の愛情もないのである。殊にたらなどになると、せつかく丈夫に育つた自分の子に出會つても、



啄木鳥

すぐに追つて行つて、食べてしまふ。こんな工合では、うっかり親に甘えることなどはできたものでない。但し、燕や雀のやうな小鳥が、人家の近くに生活して、いかに苦心し注意して巢を營むか、またいかに苦心し注意してその子を養育し成長させるか、鶏がいかによくその雛の爲に、食物を始め一切の世話をするか、つまり彼等の愛情がいかに深いかは、誰も熟知することである。

啄木鳥が樹の洞穴に巢を營むのは、勿論、雛の安全を計

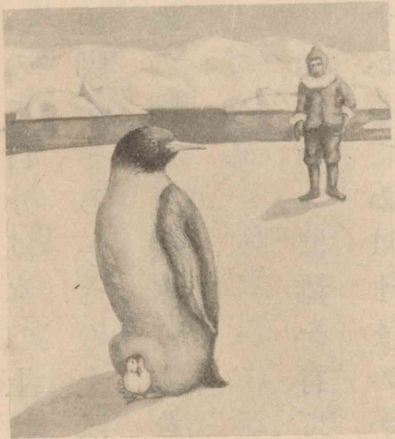
[horn-bill]

る爲である。啄木鳥に似て更に用心深く、且つ愛情のこまやかなものにホルンビルがある。ホルンビルはやはり樹木の洞穴の中に巢を営むが、啄木鳥とは趣を異にしてゐる。といふのは、その雌は抱卵中は勿論雛が自由に活動するところのできるやうになるまでは、その洞穴の中に一緒に棲んでゐるのである。即ち雌が卵を産む爲に、樹木の洞穴の中に籠ると同時に、その入口を僅かに頭の出せるだけ残して、あとはすつかり泥で塗固めてしまひ、そして雄はその期間中、



ルビルルホ

[penguin]

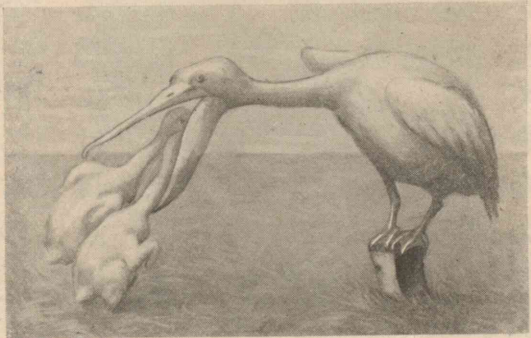


ンギンベ

雛や雌の爲に食料を求めて来て與へるのである。これなどは、全く子を愛する餘り、極度の安全を計るもので、子の安全を計る爲には、母鳥は暫くの間身の不自由を忍び、また父鳥は妻子を養ふ爲に、ひとりでせつせと働くのである。南極の愛敬者ペンギンは、翼がやゝ鰭の形をしてゐるので、他の鳥のやうに空中を飛行することはできない。否、飛行どころか、舞上ることさへできないのである。その代り、泳ぐことは頗る上手である。皆さんも御承知のやうに、ペン

ギンは南極地方の氷の上に棲んでゐる。随つて雛を養育するにも、氷の上でせねばならない。しかし幼いものを冷たい氷の上にちかに置くに忍びないので、自分は氷の上に立ちながら、兩脚をそろへ、その上に雛を載せて、雛の脚が直接氷に觸れないやうにしてやる。

ベリカン(一)は雛を育てるのに、腹をすかしてゐはすまいかと思ふと、水中にはいつて、雛の食べられさうな餌を捜し、そしてそれを嘴の下方についてゐる袋の中に



ベリカン

J. pelican

入れて持つてくる。すると雛は喜んで、親鳥の開いた嘴の中へ自分の嘴を入れて、袋の中の餌を食べる。なんのことはない、親鳥の嘴についてゐる袋は、餌壺のやうなものである。

かうした例は澤山ある。しかしこれだけでも、子鳥に對する親鳥の愛情がいかに深いかは知れると思ふ。實に親の愛情は深く、美しく、涙ぐましいほど尊いものである。千里を行くも親心。またしても「隅田川」が思ひ出される。

(一) 飯塚啓の文に據る——

(一) 動物學者、理學博士、群馬縣の海產動物學の教授、動物學の新制博物館の通論等、著がある。

(一) 歌人。御歌所寄
人。日本女子大
學教授。名は又
次郎。明治五年
東京に生まれ
た。新撰詠歌法
新井白石等の著
がある。

一六 花えらみ

(一) 武島羽衣

少女「机の上に生けおきて、

朝な夕なにうちながめ

心の鑑となさんには

いづれの花かよかるべき。」

薔薇「わがあざやかな色を見よ。

わがかんばしき香をばかげ。

君がみそばにおかんもの、

われにまさるはなかるべし。」

少女「色はありとも、香ありとも、

花のうしろに刺もちて、

人さすごときそなたをば、

朝顔「あしたあしたに疾く起きて、

怠る日なきわれを見よ。

君がみそばにおかんもの、

われにまさるはなかるべし。」

少女「身は怠らずつとむとも、

朝日さすまも待ちかねて、

しぼむがごときそなたをば

いかで鑑になさるべき。」

蓮「泥の中より出づれども、

清きはわれが姿なり。

君がみそばにおかんもの、

われにまさるはなかるべし。」

(一)「はちすばのに
ごりにそまぬ心
もて何かは露
を玉とあさむ
く」(古今集
僧正遍昭)

少女「清き姿はありとても、

露(一)をば玉とみせかけて、

欺くごときそなたをば、

いかで鑑(二)になさるべき。」

櫻 「われが心は愛らしく、

われがかたちはしな高し。

君がみそばにおかんもの、

われにまさるはなかるべし。」

少女(二)のさけき春のま中より、

にほひいでたる櫻花。

げにおくゆかし、そなたこそ

わが朝夕の鑑なれ。」

かくて少女は花かげに、

(二)「うらうらとの
どけき春の心よ
り、にほひ出で
たる山櫻花」
(賀茂真淵)

よりにて手折れる一枝を、

机の上の水入に、

さしてぞひとりながめける。——續花紅葉——

自修文

花の傳説

一 桃

(一)神代(二)の昔伊弉諾(三)の神がお妃(四)の伊弉冉(五)の女神を追つて、死人の行く夜見(六)の國へ行かれた時のことである。男神(七)は美しい女神のお姿が、まるで變つておしまひになつたので、愛想をつかして、逃げて歸らうとなさると、女神は女の鬼どもに、男神の前後をお追はせになつた。男神はお困りになつて、頭に結んだ葡萄の蔓(八)の髪飾をお投げになると、葡萄の實がなつた。鬼がそれを拾つて食べてゐる中に、神はどんだんお逃げになつた。鬼が

(一)神武天皇よりも
前の時代。
(二)天照大神や素戔
鳴尊の御父。

娑婆
この世の中。
冥土
死んだものの行
くといふ國。



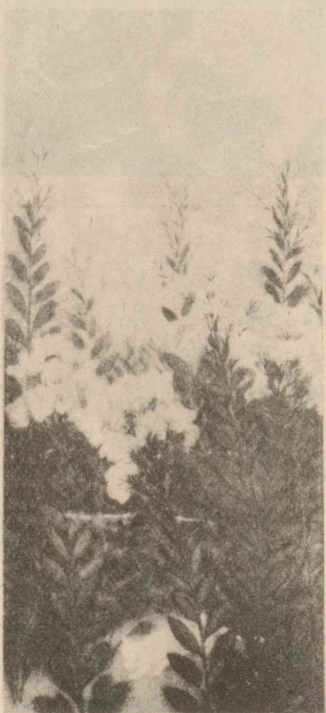
(村賀多郡名津國路淡)社神諾伊社大弊官

始つたといふ。
二 紫 苑

また追つかけてくると、今度は鬢びんに挿した櫛を抜いて、一本一本齒を缺いて投げられると、笥たねが生えた。鬼がそれを抜いて食べてゐる中に、またお逃げになつて、たうとう娑婆しやばと冥土との境まで來た時、ふと見ると、そこに大きな桃の木があつて、實がいっぱいになつてゐた。神はこの樹の上にお上りになつて、押寄せる鬼の軍勢に實を取つてはおなげになると、鬼は閉口して逃げて行つた。桃の實をぶつけて悪い鬼を拂ふといふことはこれから

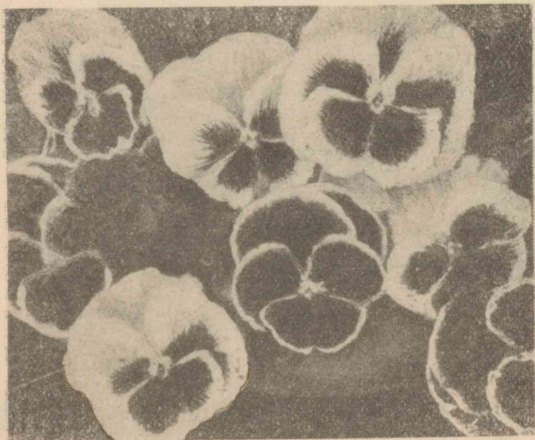
永く忘れない云
紫苑を植ゑてお
けば永く忘れない
たのである。

昔支那の國に親孝行な二人の兄弟があつた。父親に別れてから二人は悲しんで、明けても暮れても、墓の邊ほとりで泣いてゐた。けれども、いつまでもさうしてゐては、家業が廢すたつてしまつて、つまりは父にも不孝だと思ひ返したので、兄は或日墓の傍に忘草わすれぐさを植ゑて、長い間の悲みをふつつりと忘れてしまひ、明くる日から役所に勤めて、毎日の仕事に精を出した。けれども弟は兄の仕方を薄情だと怨んで、自分は兄とは反對に、永く忘れない心のしるしにされてゐる紫苑しんの花を墓の傍に植ゑて、いつまでも父の慈愛を忘



(筆畝十木荒) 苑 紫

靈驗
あらたかなしる
し。
未來
これから先のこ



三色堇

れまいと誓つた。さて或日いつもの通り墓へ行つて泣いてゐると、墓の中から聲が聞えて、「わたしはこの墓を守る鬼だが、神様がお前の優しい心をかはいさうに思し召し、わたしに命じて、お前の一生の福をお守らせになつた。この後は毎晩夢の中に現れて、あすの日のことを前以て教へてやる。」といった。その靈驗であらうか、それからはこの弟は、未來のことのよく分る國中第一の賢人になつて、幸福に世の中を送つたさうである。

三 三色堇

(1) England
(2) France.

三位一體
キリスト教で父
(天帝)と子(キ
リスト)と聖靈
との三つは實は
同一物である
といふこと。三
一體の神様と
即ちキリスト
にいふ神

(1) イギリスの田舎では、三色堇のことを少女たちが「一つ頭巾の三つ面さん」と呼んでゐるが、フランスの田舎では、同じ草を少女たちが「三位一體の草」といつてゐる。昔この花は、その色の美しいばかりでなく、香氣までが高くつて、姉妹の堇の花も及ばないほどであつたから、毎年春になつて、麥畑の間からこの花が咲出すと、誰も彼も我勝に畑に入つて、花を摘取つてゆくの、で、夏になつても、麥畑には一粒の麥の取入もなかつた。それを優しい心の三色堇が大層悲しみ、天にいます三位一體の神様にお祈りをして、自分の美しい色はともかく、せめて多くの人の心を惹く高い香氣だけでも、お取りになつて下さいと願つた。それから三色堇には、もうたゞの堇の花のやうな香氣がなくなつてしまつた代り、その年からは麥畑に澤山な實入があつたといふ。

(一) 詩人。小説家。名は春樹。明治五年長野縣藤村に生れた。集めた野村の著がある。風等多くの

一七 短夜の頃

(一) 島崎藤村

毎日よく降つた。もはや梅雨明けの季節が来てゐる。町を呼んで通る竿竹賣の聲がするの、この季節にふさしい。蠶豆賣のくる頃はすでに過去り、青梅を賣りにくるにもやゝ遅く、涼しい朝顔の呼聲を聞きつけるにはまだ少し早く、今は青い唐辛の荷を擔いだ男が來初める頃だ。住めば都とやら、山家生れの私などにはさうでもない。寧ろ住めば田舎といふ氣がしてくる。實際この界限に見つけるものは都會の中の田舎であるが、でもさすがに町の中らしく朝晩に呼んでくる物賣の聲は絶えない。

住めば都

界限

辛酸をなめる

普通の物賣とも違ひ、狭い路次路次の奥までも入込んで來て、あたりに響くやうな聲で呼んで通る銚研があつた。もう老人だ。どういふ過去の背景があるかは知らないが、この世の辛酸をなめつくした人のやうにも思へる。その聲は實に鋭くて強い。窓の格子先に來て立つ。こんな銚研があるなども、なんとなく町中に住む思ひをさせる。暫く私はあの聲を聞かない。あの銚研もどうしたか。どれ、そろそろ蚊帳でも取出さうか。これはまだ梅雨の明けない時分のこと、五月時分からも蚊帳を釣つてゐるといつてよこした人への返事に、わざと書いて送らうと思つた私の戯だ。この手紙をくれた人のやうに、五月時

感觸

分からもう蚊帳なしに暮されなくてはうるさく思ふのも無理はないが、しかし、せいぜい一月か一月半ぐらゐしかその必要もないこの町中では、蚊帳を釣るのは寧ろ樂みなくらゐである。蚊帳の内に螢を放して遊ぶことを知つてゐた昔の俳人などは、確かに蚊帳黨の一人であつたらう。それほど物好きな心はもたないまでも寝冷する心配も割合に少いところに足を延ばして、思ふさま長くなつた氣持はなんともいはれない。枕に近く髪に届く蚊帳の感觸も身にしみる心地がする。蚊帳は内から見たばかりでなく外から見た感じも好い。内に紛れ込んだ蚊を焼くといつてあちこちと持廻る蠟燭の火を、青い蚊帳越に

外から眺めるなども、夏の夜でなければ見られない趣だ。古くてもよいものは簾だ。よく保存された古い簾には新しいものにない味はひがある。簾は二重にかけて見てもおもしろい。一つの簾を通して他の簾に映る物の象を透かして見る時など殊に深い感じがする。

團扇ばかりは新しいものに限る。この節の東京の團扇は粗製に流れて來たかして、一夏の間の使用にたへないのすらある。圓い竹の柄で全部の骨が一つの竹から分れていつてゐるやうな丈夫なものは餘り見當らなくなつた。扇子にもましてもつと一時的で移りゆく人の嗜好や世相の奥までも語つて見せてゐるものは團扇だらうか。

世相

中元

形も好ましく見た眼も涼しく好い風のくるのを選び當てた時は嬉しい。それを中元のしるしといつて訪ねてくる客などから貰ひ受けた時も嬉しい。

この節の素足の心地よさもつとも裕から單衣になり、シャツから晒木綿の縹絆になり、だんだんいろいろなものを脱いだ後で私たちはこの節の素足にまで辿りつく。私は人間の身體の中で一番足が眼につくといつた足袋屋のあることを知つてゐる。それほど職業的な意味からでなく見ても、足のもつ性格の多種多様なのに驚かされる。素足の表情ほどまた夏の夜の生氣をよく發揮するものはあるまい。

蚊帳、簾、團扇、それから素足などと順序もなくここに書いて來た。自分の好きな飲料や食物のことなども少しここに書添へよう。

茶にも季節はある。一番よくそれを感じるのは新茶の頃である。ところが新茶ぐらゐる香氣がよくてまたそれの早く失はれ易いものも少くないかと思ふ。三度ばかりも湯をつぐ中に、急須きすの中の嫩葉がすつかりその持味を失つてゐることは、茶好きなものによく經驗するところである。新茶の頃がくると私はそれに古茶をまぜて飲むのを樂みにしてゐる。六月を迎へ七月を迎へする中に、新茶と古茶の區別がなくなつてくるのもおもしろい。

新茶で思ひ出す。静岡の方に住む人で毎年きまりで新茶を贈つてくれる未知の友がある。一年たゞ一回の消息があつてそれが新茶と一緒に届く。あんなに昔を忘れないう人もめづらしい。私の方でも新茶の季節になると、もうそろそろ静岡から便りのある頃かなどと思ひ出してそれを心待にするやうになつた。

簡単な食事でも満足してゐる私たちの家では、たまに手造の柳川などが食卓に上るのを馳走の時とする。泥鰌は夏のものだが私はあれを好む。年をとるにつれて殊にさうなつた。

蓴菜、青隠元、瓜、茄子すべて野菜の類に嫌なものはない

が、この節さかりに出るものはその姿まで涼しくて好ましい。冬の頃から私の家では到来物の酒の粕を壺に入れ、堅く目張をして貯へてゐるが、あれで新しい茄子を漬けることも今年の夏の楽しみの一つだ。

その短夜の頃が私の心をひくのは、一つは黄昏時の長いにもよる。あの一年の中の半分が晝で、半分はまた夜であるやうな北の國のはてを想像しないまでも、黄昏と夜明のかなり接近して午後七時半過にならなければ暗くならない夜が朝の三時半過か四時近くには明放れてゆくと考へることは楽しい。まだ私たちが眠から醒めないうで半分夢を見てゐる間に、そこいらはもう明るなつて

みると考へることも楽しい。短夜の頃、空しさはここに盡くすべくもない。そこにはまた私の好きな淡い夏の月も待つてゐる。夏の月のよいことはそれが餘りに輝き過ぎないことだ。露に濡れた芭蕉の葉から涼しい朝の雫の滴り落ちるやうな時もやつて來た。あの雫もこの頃の季節の感じを特別なものにする。あれを見るとまことに眼の覺めるやうな心持がする。長い梅雨のつづいた時分には、私はよく庭の芭蕉の見えるところへ行つて、あの嫩い夢でも湛へたやうな灰色がかつた青い卷葉が開いてゆくさまなどを、ちつと眺めながら多くの時を送つたこともあつた。

一八 加賀の千代女

佐々政一

(一)國文學者。文學博士。醒雪と號した。京都の人。大正六年歿。年四十六。近世國文學史。俗曲評釋等の著がある。
 (二)天智。天武の御代の人。
 敷島の道
 斯道の名家
 才媛

(三)石川郡。金澤の西三里十一町。同町聖興寺に千代女の墓がある。

風流

敷島の道には、古來多くの女流名家が出てゐる。額田(一)の女王、小野小町、紫式部、和泉式部などは、いづれも斯道の名家である。けれども俳句界には、まだかやうな才媛が出てゐない。芭蕉翁以來の名人は、多く男子である。この中にあるつて女流俳人を代表し、今日も世に賞讃せられてゐるのは、加賀の千代女である。

千代女は今から二百餘年前、加賀國松任(二)といふ在方に生まれた。父は福増屋六兵衛といつて、表具師であつた。家は餘り裕かではないが、表具師であるから、自然風流の道

風雅

宗匠

行脚

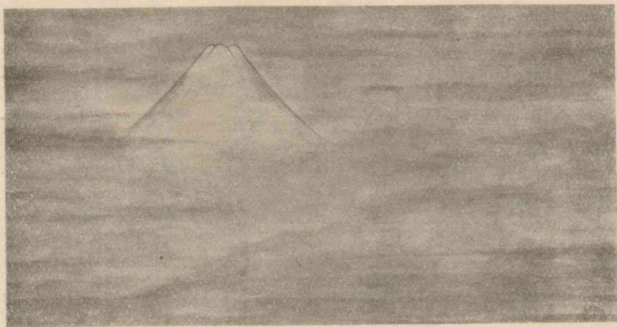
(一)美濃國の人。俳人。支考の門人。延享四年(二四〇七年)五十八歳で歿した。

にも通じてゐた。千代女はかやうな家に生まれ、かやうな父を持つたこととて、幼いながらも風雅の道に志し、殊に十七文字の俳句を好んで、小さな頭をひねつては、春花、秋月などを詠じてゐた。その頃は俳句の盛んな時代で、全国いづれの地に於ても流行を極めてをり、また有名な宗匠も少くなかつたが、松任のやうな田舎には、到底良宗匠のあるはずがない。六兵衛は勿論のこと、千代女も深くこれを残念に思つてゐた。

すると、或時名高い宗匠が、行脚のをりから、圖らずも松任に来て泊ることになつた。それは盧元坊(一)といふ俳諧師である。六兵衛はかねてから盧元坊の評判を聞いてゐたので、早速その由を娘の千代女に知らせると、千代女は飛立つばかりに喜び、盧元坊の宿を訪ねて、丁寧(一)に教を乞うた。

盧元坊はこの日長道中をしたので、大分疲勞してゐたものの、千代女の熱心に對し無愛想もできず、承諾の旨を答へ、時節に因んだほととぎすの題を出して、「一句作つて見よ。」と言つた。

千代女は早速作つて一句を示すと、「それではいけぬ。もう一句。」と言ふ。また一句考へて差出



(筆女代千) 圖 嶽 富

無愛想承諾

一所懸命
妙想

(塙)
軒端
熟睡

したが、それもだめだと取上げられぬ。千代女は一所懸命に句作に耽つたが、妙想が浮かんで來ぬ。益、考へる。その中に夜もだんだんと更けて來た。盧



加賀の千代

元坊は晝の疲に堪へぬのか、うとうとと眠り始めた。千代女は口惜しいとも思つたが、それもちよつとの間のこと、いよいよ思を凝らして、句作に熱中してゐた。

鶏の聲が彼方此方に聞え始めて、東の空が白んで來た。やがて雀もねぐらを出て、軒端に餌をあさる頃となつた。熟睡してゐた盧元坊がふと眼を

口ずさむ

(一) 各務支考の號。美濃に生まれ、後伊勢山田に住人。享保十六年(一七三一年)六十七歳で歿した。
(二) 中川氏。伊勢山田の祠官。麥林舎と號し、芭蕉の弟子。元文三年(一三九八年)歿した。
(三) 金澤の表具師福田彌八に嫁いだ。

覺して見ると、昨夜來た千代女がまだ坐つたまゝである。さすがに驚いて、「お前はあのまゝ寢ずにもたのか。」と聲をかけた。千代女はその時ちやうど句案が成つて、
ほととぎすほととぎすとして明けにけり。

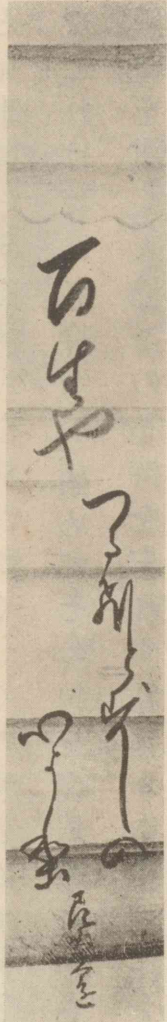
と、見事に一句を詠んだ。坊はつくづく口ずさんで見て、「いや、これは實に名吟だ。」と、始めてその句を褒め、昨夜からの無禮を謝し、「永くこの心持を忘れず勉強するやうに。」と言つて、懇に句作上の方式なども教へたのである。

その後千代女は、盧元坊の師匠の東花坊、または乙由などにも就いて學び、益、その俳名を高めた。十八歳の時良縁があつて他へ嫁いだ。まめまめしく働いて、よくその家を

治めたが、その間にもなほ句作を忘れず、時々名吟を詠んでは、世間を驚かした。曾てその愛兒を失つた時、左の一句を詠じた。

蜻蛉つりけふはどこまで行つたやら。

百生やつるひ
とすしの心よ
り
尼素園



筆尼代千

すでに小さな柩は送つたのであるが、かはいらしい姿は髣髴としてなほ眼底にある。涙の泉もかれ盡くして、たゞうつとりと去來する蜻蛉を見つめてゐると、いつしか我が兒は遊に耽つて、家路を忘れたのではないかとさへ思

ひ惑ふのが、實に母親の至情であらう。悲しいともこひしいとも言はないところに、却つて切ない情が察せられる。吟ずれば吟ずるほど、深い味はひが出る。

千代女はまた夙くその夫を失つて、たゞ一人残つた男の子に家を嗣がせ、今は心安いと、惜しげもなく黒髪を剃落して、名を素園と改め、ひたすら風雅の道を樂しんで、安(一)永四年七十四歳で安らかに往生を遂げた。

千代女

起きて見つ寝て見つかやの廣さかな
紅さいた口も忘るゝ清水かな
涼しさや恥かしいほど行戻り

(一)後桃園天皇の御
代。(二四三五
年)

往生を遂げる

(一)小説家。英文學者。名は金之助。東京の人。大正五年歿。年五十。

漱石の著書は、明暗、草枕、夢野、五右衛門、品五、巻石全集、十五巻にその作

品が収められてある。東京市牛込區。

一九 七月の日記

(一)夏目漱石

七月九日。晴天。暑さ甚し。晚方水道町から神樂坂を散歩。天神町の角の倉田屋の隣の提燈屋が纏を書いて上下に



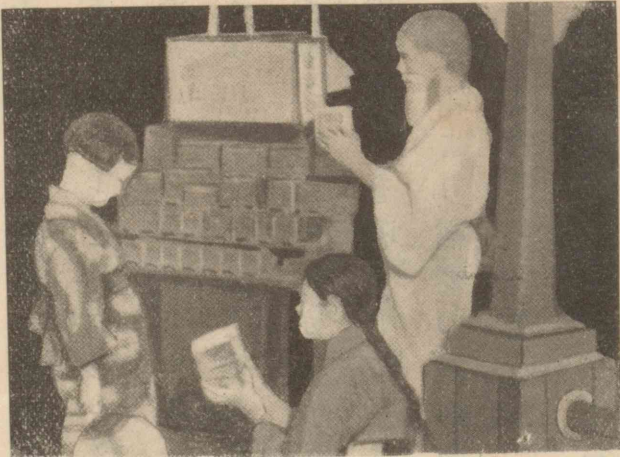
漱石 像
熨斗を散らして、真中を藍に塗つて、そこへ銀で棒を引いてみた。天井には岐阜提燈が澤山ぶら下がつてゐた。

神樂坂に蟲屋が荷を出してゐた。長さ一間くらゐの荷の上を屋根のやうにして前に暖簾をかけてゐる。黒い中に白い字が染出してある。真中に山の下へ越の字、その左

昏々

(一)Ice-cream.

右に蟲の名が並べてある。松蟲、鈴蟲、轡蟲、……中には籠がいつばいある。扇の形、舟の形、鳥籠の形、紫の紐でくくつたものや、緋の紐で結んだもの、それから家の形にできたもの、蟲屋はその下に腰をかけてゐる。殆ど足を動かすことさへできない。十一日。かんかん照りつける。殆ど堪へ難い。籐椅子の上で昏昏としてゐる。晚方えい子と、あ



屋 蟲

い子純一を連れて神樂坂へ散歩に出る。氷屋でアイス

J. Beal

リームを飲む。純一は氷あづきを食ふといふ。おもちや屋でえい子は金製の^(一)ベッド、あい子は西洋人形、純一は飛行機を買ふ。この飛行機は、飛ぶこと受合のところ、ちつとも飛ばず、翌日すぐ破れてしまつた。

十四日。六時頃散歩に出ようかと思つてゐると、空が急に暗くなつて、雨が木の葉をうつ音がした。それがまた、く間に豪然として地上のあらゆるものを鳴らして、すさまじく降出した。すると雷が鳴つた。雷より稲妻の方が激しかつた。光が段々になつて最高度は白晝と異なるところなく光つた。さうしてその段々が一瞬の間にすべてを經過してしまふ。あとは暗くなつてもものすごい。芭蕉がす

(一) 東京市の小石川と牛込との區境を流れてゐる。

(二) 東京市小石川區陸軍造兵廠内にある。舊水戸公の庭園と改稱された。

さまじく動いた。光に恐れて、縁側の戸を立ててゐた下女が突然玄關へ來てつつ伏した。この時電燈が全く消えた。巨人が帛を裂くやうな音がしてそれがすぐ割れた。

十七日。曇。十時頃から降出す。

昨夕^(一)江戸川を散歩して澤山ある橋の中の最も小さい橋の欄干によつて東を眺めたら、水の左右から水の上のしかかるやうに柳が緑の枝をさし出してゐた。それが遠くに行つて櫻に變つて、兩岸が蒼く丸くこんもりと高く見える中に水が長く流れた。その中を、橋がいくつも横切つてゐる。さうして、すべての末に、後樂園の^(二)高い森の中から砲兵工廠の煙突が二本出てゐた。

蒼茫

こんどは電車終點のところへ来て、橋の欄干によつて西の方を望んだ。その時は人の顔が漸く區別されるくらゐの薄暮であつた。その上空が曇つてゐた。けれどもその薄黒い空明りが水の上に落ちる爲か、流一面が蒼茫とした地面の上よりも、岸よりも、明らかにきらきらしてゐた。その中に小船に人が二人乗つて棹さして上つて行く。船も人もたゞ眞黒に輪廓が眼に映ずるだけであつた。動く棹がやはり細く黒く見えた。この黒いものが光る水に包まれて、廻り燈籠の影法師の如く見えた。やがて豎にさす棹の色がぼんやりして判然しなくなつた。

— 漱石全集 —

二〇 夕立

(一) 徳富健次郎

(一) 小説家。熊本縣の人。曾て蘆花と號した。昭和二年歿。平生、自然主義者。著書は外に多くある。

けふ早めに夕飯を食べて庭に出てゐると、北からひいやりと風が來た。眼を上げると、果して果して、北に一團紺青色の雲が立つてゐる。その紺青の雲を背にして、こんもりとした隣家の杉や、檜の木立、孟宗竹の藪などが、いづれも生々しい緑を浮かしてゐる。

「夕立がくるぞ。」主人は大聲に呼んで、手早く庭の干物、履物などを片づける。裏庭では、婢が驅けて來て、洗濯物を取入れた。

やがて食卓から立つて妻子がおりて來た頃には、北天

天穹
天心

(一)ヨハネ黙示録。
キリスト教經典
の「新約聖書」中の
一篇。



雷 雨 (大智勝観筆)

の一隅に埋伏してゐた、かの濃い紺青色の雲が、忽ちにもむらむらと湧起つて、なんの艶もない濁つた煙色に成り、見る見る天穹をはひ上り、大軍の散開するやうに、東に、西に、天心に、ずんずんと擴がつて來た。三人は芝生に立つて、驚歎の眼を見はつて、この夥しい雨雲の活動を見た。

あな夥しの雲の勢や、黙示録に、天は卷物を卷くが如く去行く。」と歌つたも無理はない。青空は今南の一軸に卷き

煤煙
ひた押し
眞夏の喘
冥府

ちぢめられ、煤煙の色をした雲の大軍は、その青空をすら餘さじものをと、南を指してひた押しに押寄せてゐる。つい今しがたまで雨をこひしがつてゐた乾ききつた眞夏の喘は、どこへ行つたか、たゞ十分か十五分の中に、大地は恐しい雨雲の下に閉ぢこめられて、冷たい暗い冥府になつた。

雲の運動は秒一秒激しくなつた。南を指して流れる雲、渦まく雲、眞黒に屯つて動かぬ雲、雲の中から生まれる雲、雲を摩つて移りゆく雲、濃くなり淡くなり、淡くなり濃くなり、北から東へ、東から西へ、北から西へ、西から南へ、逆流して南から東へ、世界中の煙をここに集めて、煤煙の限り

なく湧くやうに眼を驚かす雲の大行軍の響を聞かぬが不思議である。

冷たい風がすうつすうつと顔に當る。後馳せに雷がそろそろ鳴り出した。北の方で、條をなさぬ紅や、紫の電光が、時にはつばつと天の半壁を照らして閃く。近づく雷雨を感じつゝ、我等はなほ頭上の雲から眼を離し得なかつた。薄汚い煤煙色をした満天の雲は、益々南へ流れた、水のやうに、霧のやうに、煙のやうに。空は皆動いてゐる。濶い空はどの一寸四方として、動いてゐないのはない。草木も人も息を屏めたかのやうに、一切の物音ははたと絶えた。空はたうとう雲をかぶつてしまつた。著しく水氣を含

す
天の半壁を照ら

〔Lamp〕

んだ北風が、ばつばつと顔をうつて來た。やがて粒だつた雨になる。雷も頭上近くなつた。母屋の南面の雨戸だけ残して、悉く戸をしめた。暗いのでランプをつけた。

ざあつと降りだした。雷が鳴る。一庭の雨脚を凄しく見せて、ぴかりと電が光る。颯々と激しく降りだした。

見る見る庭は川になる。雨が飛石をうつてはねかへる。目に入る限りの青葉が、一葉一葉に雨を浴びて、うれしさうにぞくぞく身をふるはしてゐる。

「あゝ、いいおしめりだ。」と誰かがいふ。

「まだ七時だよ、まあ、妻と婢との驚いた聲がする。夕立から本降りになつて、雨は夜すがら降つた。」

自修文

白鷺の群

(一) 五十嵐 カ

夕立が降つて来た。まづぼつりぼつりと白玉のやうな大きいのが間遠に落ちて、やがて小さいのがばちばち、ざあざあとして足繁く降つて来た。空は篠つく雨としぶきとで大騒亂を演じてゐる。白い長い雨脚が空中を隈取つて風のまにまに北へ北へと移つてゆく。屋根の上は川をなして樋の受切れぬ水がナイアガラの瀧のやうに軒端から直下する。南縁の雨戸はもう締めねばならぬやうになつた。

激しい雨の勢にも潮のやうな強弱さじひきがあつて、およそ四五十分もつづいたであらう。やがて天地が明るくなつて、日影が鮮かに射して来た。きまり悪げに降つてゐる名残の雨は、落武者のやうに次第次第に遠ざかつて、遂に全くその影を収めた。

(一) 國文學者。文學博士。早稻田大學教授。明治七年山形縣に生まれた。新文章講話。新國文學史。國歌の胎生及發達等の著がある。

間遠

篠つく雨

つよくはげしく降る雨。

雨脚

雨の降り過ぐる様。

(二) Niagara.

アメリカ合衆國と英領カナダの境にある大瀑布。

落武者

戦に破れてにげる武者。

造化

宇宙を司る神。

嚇怒

あらあらしくいかること。

(一) 臨濟宗。東京市小石川區。

(二) 東京市小石川區東京帝國大學の附屬。

(三) 東京市本郷區菊坂より北。道分片町までをいふ。

(四) 小石川區伊達侯爵家の屋敷。今はすべて市街となつた。

造化くわくわ嚇怒おどに大洗滌を加へられた雨後の天地は到る所、光と潤ひと生命とに満ちてゐる。

締めた雨戸が明放たれた。同時に「まあ」といふ聲が聞えた。つづいて、

「早く来てごらんさい。あの綺麗なこと。」

といふのですぐに縁側に飛出した。

何といふ美觀であらう。東福寺から植物園にわたる丸山臺(一)の十數町の林は、白鷺の群で雪のやうになつてゐる。飛んでゐるもの、とまつてゐるもの、團かたまつてゐるもの、散らばつてゐるもの、それが雨に濕つた濃緑を背景にして、それぞれに鮮かな姿を浮かし出した趣は、實に繪にも筆にも盡くされぬ美しさである。伊達(四)の森の白鷺が羽馴しに雛を連出したのであつた。伊達の森といふのは宇和島の伊達家の屋敷で、日本一の鳥

孵化
鳥類の卵をかへ
して、ひなに化
すること。

ひねた容子
ことかへつた様
子。

藪といはれてゐる。三月時分から九月十月の頃まで、この藪に
巢をくつてゐる白鷺、五位鷺の数は四五萬もゐるであらう。そ
の間この近傍では朝から晩までいつ空を仰いでも、二十羽三
十羽の鷺を見ないことがない。この夥しい鷺がここで卵を産
んで雛を育てて霜の降る時分に南國へ移つて行くので、四月
より五月にわたり雛の孵化する頃になると、殊に夜分などは、雛
鳥のぴいぴいふ聲が相合して、工場の機械の運轉するやう
に聞える。この雛が孵化つて四五十日経つと、親鳥が時々雛を
連出して飛ぶ稽古をさせるが、その稽古を大演習的にやるこ
とが年に二三回はある。今日のが即ち大仕掛の演習である。
同じほどの大きさで、同じく眞白に見える中にも、親鳥はや
はり親鳥らしく、がつしりとひねた容子をして、子供等を願が
ちに樂々と飛んで行く。雛は不揃な飛方をして、ばたばたと早

く飛んでは一休みし、一休みしては早く飛びつゝ、親鳥につき
纏つて行く。親鳥が高い木の尖頭しんがうに立つて下を見てゐると、數
十羽の雛が下枝に並んで、口を開くやうにして親鳥を仰いで
ゐる様子など、何といふかはいさであらう。

今日の大演習は驟雨の後の快晴の氣持よさに、そのか唆された臨
時の催しであつたであらう。彼等の中にも小隊長、大隊長、總大
將といふやうなものがあるであらう。いろいろな號令の使ひ
わけがあるであらう。伊達の森は彼等が夏を過ごす別荘で、南
國のどこかには別に冬を過ごす別荘をもつてゐるであらう。
彼等は丸山臺の林を青山(一)か習志野(二)かのつもりであるであら
うなどと、とりとめもない空想に、耽りつゝ、暫く立ちつくした。
眞白な空中の演習隊が全く伊達の森に引上げたのは、およ
そ一時間の後であつた。

(一) 東京市赤坂區、
西南部一帯の地、
練兵場は大部分
明治神宮外苑に
あてられた。
(二) 千葉縣千葉郡西
北部の郊外。明
治六年に陸軍練
兵場が設置され
た。

(一) 小説家。早稲田大學教授。明治十九年佐賀縣に生れた。島の日。小鳥の來る日。運命の秋等の著がある。

(二) 山口縣。開港場。海を隔てて門司に對する。また馬關ともいふ。

(三) 有名な都市。開港場。神奈川県。東京の西南八里。

二一 旅人となりて

吉田絃二郎^(一)

今朝八時半の特急で、下關^(二)まで一氣に走ることにした。避暑の客や何かでこみ合ふことだらうと思つてゐましたが、さほどでもなかつたので、大助りでした。

東京を立つ時には珍しく細雨を見ましたが、横濱^(三)あたりからすつかり晴れて、またもとの蒸暑い天氣になりました。

青い山、青い畑が鐵道線路を挟んで迫つてくると、谿間にも、野の面にも、白百合がちらほらと見えます。葛の花や朝顔が、畑にも、家のまはりにも咲いてゐます。空も、山も、流



畫師之藤本山

白 野 中

も、光に輝いてゐます。

眼を閉ぢて車のきしる音を聴きます。汽車はひたすら
に光の野を西へ走ります。

國府津(一)に着いて始めて海らしい海を見、山らしい山を
見ることのできたのは、うれしいことです。箱根(二)や乙女峠(三)
には雲がかゝつてゐます。

箱根に入つて、さすがに高原らしい涼しさを覚えまし
た。文字通りに青い毛氈を敷いたやうな裾野には、明方の
星をばらまいたやうに、白い百合が咲きこぼれてゐます。
線路に沿うた圓い柔かな線を急がいた丘には、離々たる
青草の上に、盛上げられたやうにして白百合が咲いてゐ

(一) 共に神奈川縣
足柄下郡

(二) 箱根、足柄の兩
道の中間。駿河
津峠ともいふ。

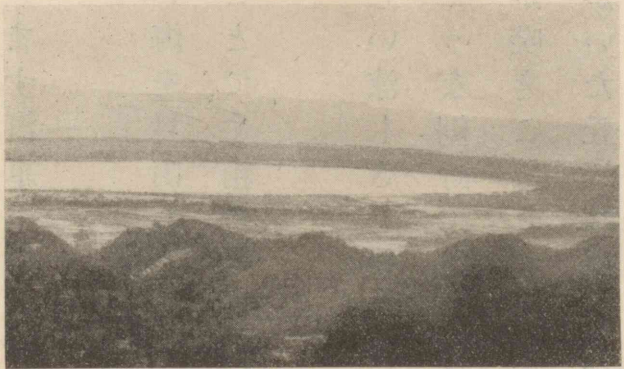
(合歡木)
(女郎花)
青嵐

ます。ねむの花も、石竹も、をみなへしも、一樣に青嵐と芳草との中に七月の光を浴びてゐます。

清冽

川は痩せてゐます。白い礫の上を滑る清冽な水は、青い山の裾を縫うては、青い嵐の中に隠れて行きます。蓑を被て深潭に釣を垂れてゐる男もあります。高原を走る汽車を見おろして、更に高い山道を歩いてゐる少年の群もあります。乙女峠には雨が降つてゐます。

深潭



一のそ 望展の澗河駿

(迤)

(一) 静岡縣田方郡

「富士山は見えますか。」

私は突然隣の男に沈黙を破られました。その男は始めて日本を旅行する臺灣人でありました。富士は雲に鎖されて見えませんでした。私はこの旅人に對して氣の毒に思ひました。私は微かに雲霧の間にほの見えてゐる富士の稜線をたどつて、その男に富士の形を説明しました。

汽車は裾野を三島の方へ走つてゐます時々横なぐり



二のそ 望展の澗河駿

時雨
雨の脚

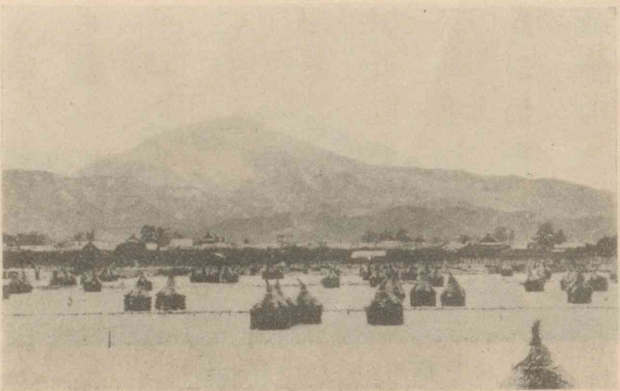
に時雨のやうに寂しい雨が降つて來ます。斜に打ちつけられた雨の脚がまだ乾ききらぬ間に、正午の太陽が焼くやうに硝子窓を射ます。けれども、高原の風は青く薫つてゐます。禁喫煙の禁を犯して煙草をふかしてゐる男もありません。けれどもここでは、それを憎む氣にはなれません。薫風と青嵐との間に包まれた人間の集合は、自然が生んだ可憐な嬰兒の遊戯に過ぎません。彼等の行爲はすべてさながらのもの、善きものとして受けいれられることができるやうに思はれます。

私は幾たびか小さい行李の底から本を取出しました。けれども、私はすぐ本を捨てました。どうしてこの偉大な

薫風
可憐な
嬰兒

(黍)

自然から私の眼を離すことができませう。



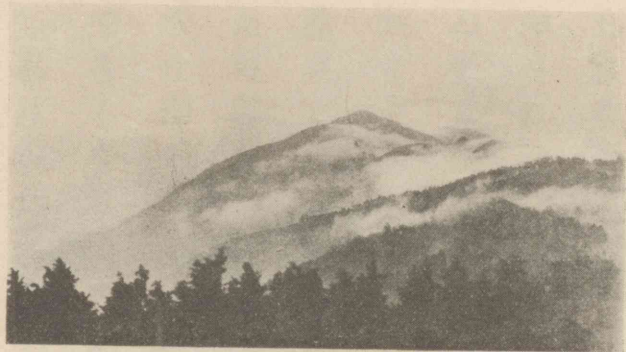
伊 吹 山

桑の畑、芋の畑、きびの畑を隔て、汽車は富士を中心に、大きな圓を彙がいて走つてゐます。きびの楮い穂の上に雲の峰がかゝり、四十雀の唄が聞えてゐます。馬洗ふ里の子供たちの上に煙を残しつゝ、汽車は鐵橋を渡つてゐます。

うとうとと眠つてゐた眼に、紅い蓮の花の咲いた田が長く長くつづいてゐるのが映り

抒情詩

(一) 滋賀縣。琵琶湖の東北。近江と美濃との國境に聳えてゐる山。
 (二) 岐阜縣。慶長五年石田三成等が徳川家康と戦つた所。
 (三) 滋賀縣。米原の東北一里餘。
 (四) 夏草やつはものどもが夢のあとし。



比 叡

ます。淡い薫が夢を誘ふやうに窓を襲うて來ます。一羽の白い鳥が紅い花の上を靜かに翔んで行くのが、靜かな抒情詩を讀んでゐるやうな心持を喚びおこします。おひおひ太陽が陰つてゆきます。伊吹山の白く頽れた傾斜面が、午後(一)の太陽をまともに反射してゐます。關原や醒井などいふ聯想の多い驛名がつづきます。芭蕉の夏草(二)の句を想はせるほど、山も平野も青々としてゐます。この附近から西は野の百合が紅くなります。

水郷
 (一) 滋賀縣。京都府に跨がる。海拔八七〇メートル。

湖水に沿うた村々の家の白い壁には、力ない夕陽の影が動いてゐます。田や畑の隅々に小さい木立があつて、そこには青い竹で作られたはねつるべがかゝつてゐます。若い女たち(一)が二三人づつて耕作物に井戸の水を撒いてゐます。二段にも三段にも水車をかけて、湖の水をかい出してゐるのも、水郷の感じを深くさせます。比叡(一)の峰は曇つてゐます。黒い雲を破つて眞紅な夕焼



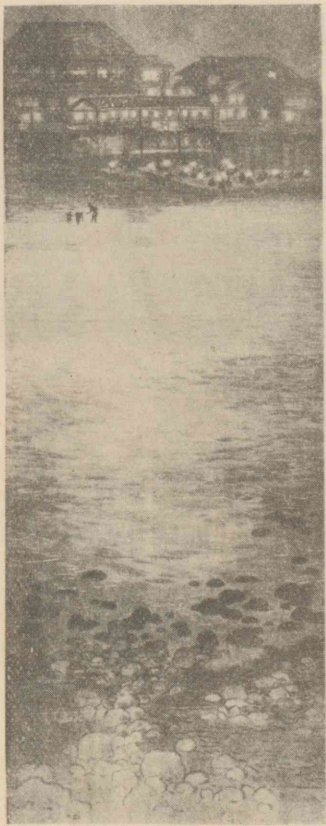
多 瀬 (筆紅紫村今)

(一) 瀬多川。琵琶湖から出て、宇治川に至つて宇治川となる。

(二) 滋賀縣と京都府との境に聳えてゐる山。

が湖面を壓するやうに燃えてゐます。瀬田の流に群をなして白い鳥が眠つてゐます。

逢坂山のトンネルを越えると、大きな角の牛がのその



(筆江參本川) 灯の川茂賀

そと荷車を曳いて、近江の方へ歩いてゐます。黄

昏は牛の背に落ちかゝてゐます。

日はとつぷり暮れました。紅い提燈の灯が闇の中に幾段にも幾段にも重つて、流に沿うて映つてゐます。

(一) 京都市の東部を流れる。

(一) Platform.

「賀茂川の灯。」

人々は窓を明けて、闇の底に紅い灯を見出してゐます。長いプラットホームに下駄の音が響きます。思ひなしか、下駄の音までゆつたりと聞えます。

人々は大方出て行つてしまひました。新聞紙や折などの散らかつた薄暗い室の中に、私はまたこれから先の二百里餘りの旅路を想つてゐます。

さすがに旅らしい寂しさがどことなく漂うてゐます。

——生くる日の限り——

(一) 詩人。本名は又平。明治七年堺市に生まれた。無弦弓塔影。無生集。醉茗詩集等の著がある。

二二 山の歡喜

河井醉茗^(一)

あらゆる山がよろこんでゐる。
あらゆる山が語つてゐる。
あらゆる山が足ぶみして、
舞ふ、躍る。
あちらむく山と、
こちらむく山と、
合つたり、
離れたり。
出てくる山と、
かくれる山と、
低くなつたり、
高くなつたり、
家族のやうに親しい山と、
他人のやうに疎い山と、
速くなり、
近くなり、
あらゆる山が、
山の日に歡喜し、
山の愛にうなづき、
今や
山のかゞやきは
空一ばいにひろがつてゐる。

あはれゆる山がよろこんでゐる。
あはれゆる山が語つてゐる。
あはれゆる山が足ぶみして、
舞ふ、躍る。
あちらむく山と、
こちらむく山と、
合つたり、
離れたり。
出てくる山と、
かくれる山と、
低くなつたり、
高くなつたり、
家族のやうに親しい山と、
他人のやうに疎い山と、
速くなり、
近くなり、
あはれゆる山が、
山の日に歡喜し、
山の愛にうなづき、
今や
山のかゞやきは
空一ばいにひろがつてゐる。

—現代詩人選集—

二三 禮儀作法

日本人は禮儀正しい國民である。知人は往來で遇つても丁寧に頭を下げ腰を曲げて、二度も三度も御辭儀をする。かやうなことは外國では見られぬことであるから、自國の風俗に較べて西洋人は珍しく思ひ、我が國民の禮儀作法に厚いのに感心するのである。また日本人が始めて西洋の社會に入れば、その應對やあいさつの甚だ簡易なのに驚くのである。余は始めて外國の芝居を見た時、王様の前に出た大勢の家來が、御辭儀もせず、行儀よく並びもせぬのを異様に感じた。日本の芝居を見慣れた目には、よ

芝居

奇怪

ほど奇怪に感じたのである。

日本人の現今の禮節は、久しい間の封建時代を経て、甚しくわづらはしくなつたものに相違ない。當時社會が上下種々な階級に分れて、自分の仕へる主君の上に主君があり、その上にもまた主君があるといふ有様であつたから、主君に頭を下げる度よりは、今一層低く主君の主君に向かつては下げねばならず、主君の主君が頭を下げる主君の主君の主君には、土下坐もしなければならぬといふ風に、多くのむづかしい禮儀の階級や、尊卑の階級が生じた、また上からは自分の尊嚴を保つ爲に、だんだんと下の方に向かつて禮節を嚴重に守らせたのである。かやうに

階級

七重の膝を八重に折る
(遡)

封建時代階級の制度が、七重の膝を八重にも折るといふ
禮節を作つてゐるには相違ないが、しかしその本源にさ
かのぼれば、遠い昔の神を貴ぶ民族の風から出たのであ
る。古代の國語を見るのに、すでに多くの敬語をもつてゐ
る。古事記の神々の名には、數多の敬語や尊稱が含まれて
ゐる。神名の上に天、神、稜威、嚴、齋、忌、御、廣、大などの語のある
のは、皆その事業や性行などに就いて讚美の意を表した
のである。「ひこ」「ひめ」は「日子」「日女」である。「みこと」は「御事」であ
る。また「御子」「皇子」「御家」「宮」などはすべて「御」といふ敬稱辭を
附加したものである。「お」「御」は「おほ」の略。「おほ」は「大」「多」等の語
基で、これも敬稱辭である。かやうな敬語が、後世になるに

讚美

随つて神、皇室、皇族から大臣、公卿にも用ひられ、次第に廣
がつて一般人の間にも用ひられるやうになつて、今日の
やうに敬語の多い日本語となつたのである。

祖先崇拜

祭祀
社稷

支那民族も我が民族と同じく祖先崇拜の民族である。
祖先の祭祀を大切にする民族である。社稷といふ語が國
家の意味になつたのは、この爲である。孔子の教には禮を
第一に數へてある。この教が我が國に入つたことも、確か
に我が國民の禮節を重んずるやうになつた一原因に相
違ないが、これを待つて始めて我が國民が禮を知つたと
思ふのは、大きな誤である。我が國民は上代からまつりご
とを以て國を建てた國民であるから、上代から禮儀作法

重複

莊重森嚴

坐作進退

に於て慎んだことはいふまでもない。『をがむ』といふ語は「をろがむ」の略で、「をれかむ」から出た語である。我が國民が神を祭る時には、坐つて禮拜するので、それからできた語である。祭祀に用ひた祝詞のりとの文の結構は、恰もその儀容を見るやうに、語を重複し、對句を重複し、文段を重複して、莊重森嚴にできてゐる。かやうに神を祭る儀式、祖先を祭る儀禮を貴んだから、これが平常の坐作進退にまで及び、神に對する心得が日常の生活にまで及んで、後世の禮儀作法ができたのである。

かみを祭り、かみに對する時ほど、心の正しい時はない。「禮」の古語は「みや」である。みやみやしく（恭しく）神を祭る時

權威

の態度がみやである。即ちこのみやを以て身を修め、それに則つて平生の坐作進退をなすことは、人の最も立派な行跡で、一室に獨坐する時でも、その心掛その態度で居らねばならぬといふ考が、國民の禮儀を發達させた重大な原因である。儒教はこの點に於ても、よく我が國民性に合したものであるから、一層この風を盛んならしめた。かの勢望ある人の權威命令は、たゞこの風習を利用して、一層その段階を作つたに過ぎぬものである。

西洋に於てもまた種々な禮儀作法がある。交際上の習慣はなかなかむづかしいものである。これは昔の騎士道から發達して、婦人を重んずることが主になつてゐる。文

明國である以上、日常の交際に禮節を重んずるのは當然であるが、元來が平等主義の歐米諸國と、元來が「かみ」崇拜の我が國との間には、自然に差別があるのである。階級制度の廢棄と、西洋文物の輸入とで、今日の我が國の禮儀作法は、大いに亂れてゐる。學生社會に於ては、殊に禮節の觀念が薄い。古來「かみ」を貴ぶ禮節の國民が、このやうに一切の舊禮を忘れるほどな大變革をやつたればこそ、明治の維新もできたのではあるが、せめては一切の禮式に於て、もう少し秩序が立ち、統一がなければなるまいと思ふ。國民は決して我が國體と大關係ある禮節を忘れてはならぬのである。

自修文

我が國の家庭

小さい兄や姉が、弟や妹を背負つて路端に遊んでゐるのは、我が國ではどこへ行つても見受けることであるが、西洋では決して見られない。それを始めて見た或外國人が、「なんとといふかはいらしい様子であらう。ここに日本の美しい國風が見える。」といつて、感心したさうである。すなほに親の言付を守るのは、日本の子供の美德である。兄や姉が自分よりも小さい弟や妹をかはいがつて世話をするのも、日本の子供の美德である。世話になつた弟や妹が、兄や姉を大切にすることも、日本の家庭の特色である。この西洋人は、くはしくは我が國の家庭の内部を知らなかつたのであらうが、路端の子供を見て、我が家庭の美

美德
うつくしい道

日本の家庭云々
日本のある他よりすぐれた有様。

一端
かたはし。
東西
東洋と西洋、即ち世界中の意。

七夜
子が生まれてから七日目。

因む
よる。かたどる。

命名する
名をつける。

郷土の神。
産土神。

七五三の祝
男子の三歳と五歳、女子の三歳と七歳との年の十一月十五日に行ふ祝。

袴着
男子が五歳または七歳の時始めて袴を着ける時の儀式。

帯の祝
女子が三歳五歳または七歳の時始めて帯をつける時の儀式。

ひたすら
一心に。
傾ける
十分によるこびをつくす。

知友
ともだち。

老を慰める
自分の年よつたのも忘れてよるこぶ。

徳「父母ニ孝」兄弟ニ友」の一端を認め得たのである。父母の子を愛する情は東西共に變りはないが、日本の家庭では殊に子供を大切にす。家の貧富貴賤によつて、生活の上にはそれぞれの差別があつても、一體の風習は子供を大切にす。子供は父母の寶といふのみでなく、家の寶として尊重される。子が生まれた時の父母の心は、家の後繼ができたのを喜び、家の益繁昌してゆくのを祝ふのである。親族も朋友も皆同じ心で祝賀するのである。七夜までの中に名を附ける。行末は立派な人になつて御國の爲にもなれ」と、祖先の名に因んだり、めでたい語などを選んでりして命名する。三十二三日目には、産土神にお宮参りをして、誕生したことをお知らせする。三つ、五つ、七つとだんだん成長すれば、七五三の祝といつて、その年の十一月にお宮に参詣する風習もある。男の子の袴着の祝、

女の子の帯の祝、父母はひたすらその子の成長を楽しむのである。
三月三日の雛祭は女の子の節供、五月五日の端午は男の子の節供、一家中の歡喜は子供等の爲に傾けられる。美しい雛人形、勇しい鯉のぼり、かういふ楽しい日は年々に繰返されるのである。盆やお歳暮の贈物にも、父母は子供等を喜ばせようと苦心し、親類知友からも、お子様へと心をこめた品物を贈る。我が國の都市ほどおもちゃ屋の多い所はないといふのも、小さい國民をかはいがる國風の盛んなことを證明するのである。我が國の家庭には、お父さんもお母さんもお祖父さんもお祖母さんもいらつしやる。日本の子供は父母の慈愛の外に、祖父や祖母の愛をも受ける。祖父や祖母は孫をいつくしんで老を慰める。家の中には神棚があり、佛壇があつて、先祖の位牌を

系圖 祖先からのつづきを書いたもの
 別家 或家族から分れて獨立した家庭。分家といふ。
 (一) 人の子たるものは父母をわが家の神ともあがなつて大切にせよとの大意にせよと大切にするこ
 (二) 國學の大家。伊勢松坂の人。享保元年(二四六一年)歿。年七十二。
 大人 學徳の高い人を稱。たつとんでいふ。
 あがめる たつとぶ。
 つましましやか 意。つしましやか

まつつてある。我が國の家は先祖からの家で、先祖と一緒に住んで居つて、だんだんと子孫に傳はつてゆくのである。家には家の系圖もあり、先祖から傳はつた品物もある。新しい家や別家した家には、さういふものがないところもあるが、本家にさかのぼり、源を正せば、皆それがある。家には家の紋もある。
 (一) ち、は、はわが家の神わが神と
 心つくしていつけ人の子
 (二) と本居宣長大人は歌はれた。父母は子等を家の寶と思ひ、子等は父母を家の神とあがめるのが、我が國古來の道である。親の親の世から傳へて來た道である。親しい懐かしい親愛の情に、貴い有難い敬愛の情が湧いて、父母に對しては神に對するやうなつましましやかな心持になるのである。それ故、言語動作にもそれが表れてくる。外國の家庭では親子、夫婦、兄弟、姉妹の間

對等 上下なく同等であること。
 先祖と同居 家の内には神棚なり佛壇なりのあるのでいふ。

の言葉遣はすべて對等であるが、家の神と仕へ奉る父母に對しての言語は固より別でなければならぬ。先祖と同居してゐる我が國の家庭では、目上に對する言語と、目下に對する言語とに明らかな差別がある。親代りに世話をし、いたはつて下さる兄姉に對しても、敬語を使はなければならぬ。兄姉はあくまで幼少な弟妹を憐み、弟妹はどこまでも兄姉を目上の人とあがめ、兄弟仲よくして父母に仕へ、父母の心を慰めて、ここに美しい家庭が成立つのである。父母ニ孝ニ、兄弟ニ友ニ、夫婦相和スル家庭が存立するのである。
 西洋人は「日本は子供の樂園である。」といつてゐる。日本は子供をかはいがる國である。」と西洋の讀本にも書いてある。我等がこの國に生まれたのは、我等の幸である。

二四 鳴蟲の話

喜悅

團欒

やり水

清淨

夏、湯上りの縁先に、冷風と共に夕暗がしのびよる頃、靜かに奏でる蟲の音は、暑熱と勞動の後で味はひ得る夏の夜のこの上ない慰安であり喜悅であります。

旅の空、閑居のほとりに、一家をあげての團欒の食卓に、やり水をすませた庭の隅に、或はまたつるべたれた井戸の傍に、並木の下に、我々はいたる所にも鳴蟲の悲哀に接し、歡喜に耳そばだて、清淨さに心打たれるのです。

秋の鳴蟲、それは夏のものです。汗を流した晝間のつづく限り夜のものです。

素直

夏の夜のそゞろ歩きに、縁日の灯をくゞれば、きつとそこで市松格子の屋臺に、美しい蟲籠を列べた假小屋からさまさまの蟲の聲がさざ浪のやうに流れ出て、我々の足をとどめずにはおきません。

何故このやうに鳴蟲が、特に我々日本人を惹きつけるのでせうか。これは一面に於ては日本人の性情を語ると共に、我々の祖先のやさしい、そして素直な自然愛護の精神を證據立てるものであるといはれて居ります。さうです。確かに我々の祖先は他のいづれの民族にもまして、自然の愛好家でありました。自然のさしのべた腕にしつかと抱かれて、その胸に耳をあてて、限りない詩情をそゞつ

たものであることは、文書の明らかに物語つてゐるところです。しかも日本人はその樂天的である反面に、哀愁を解して、これにやるせない愛惜を感じるものです。更にまた小さきものを蟲いとしむ心の強いのものです。蟲の音がふるほどに聞えて、秋の夜長をにぎはせ、或は悲しませます。たゞ靜かに靜かに愁をとりたい、そんな氣持の時には絃樂も器樂も鳴蟲の嫺々たる音樂には敵すべくもありません。



嫺々

歸化人

(1) Lancelotti-Hearn
小泉八雲。英國人であつたが、明治二十八年日本に歸化した。明治三十七年歿。年四十九。

(2) Grotesque.

(1) 外國人ではあるが、歸化人として、日本人の心に觸れたラフカディオ・ハーンはその著「昆蟲音樂師」の中に「日本を訪問する者は、少くとも一箇所は縁日をのぞいて見なければならぬ。縁日は夜、無数のランプや提燈の火の影に映つてあらゆるものが美しく見える。この經驗を経なければ日本は分るものではない。日本人の日常生活に現れる美とグロテスクとの不思議な融合、奇妙と可憐との魅力が分るものではない。そこではいろいろのおもしろいものに觸れるけれども、その中でもつとも注目すべきは小さな木製の籠を澤山備へてゐて、幻燈のやうに光り輝いてゐる小屋がけである。その小屋がけは歌ふ蟲をあき



蟲をみる (土佐光之筆)

なふ商人の小屋がけて、そこから鳴蟲の嵐が流れ出るのである。それは奇妙な観物で、外國人は殆どいつもこれに惹きつけられる。といったやうな意味のことをいつてゐます。

夜をこめて可憐な音楽を奏でる。これ等の鳴蟲はいつたいいつ頃から、我がの祖先を慰めてゐたのでせうか。鳴蟲に關する最初の記録は、平安時代の物語に現れて居ります。その頃からすでに鳴蟲はそここの野邊の草葉の

高雅

賞玩

宿に鳴いてゐました。高雅な性情と趣味を持つた宮人たちは、これを捕へて籠にいれたり、部屋の前庭に放つたりして、蟲の音を賞玩してゐたのです。その蟲がなんであつたかは明らかでないが、松蟲と鈴蟲だけは知られてゐました。しかし松蟲はリンリンと鳴き、鈴蟲はチンチロリンと歌ふものであるやうに、ちやうど今と正反對に考へられてゐたのです。更にまたその當時の和歌を見ると、松蟲は鈴蟲に比して遙かに澤山詠みこまれてゐますが、これは松蟲のまつが何々を待つまつにかゝるといつた言葉のあやから大した考へもなく、鈴蟲まで松蟲のやうに歌つたのだらうと思はれます。

—東京朝日新聞に據る—

二五 新秋の望

近松 秋江

(一)小説家。本名は徳田浩司。明治九年岡山縣文壇に生まれた。返らぬ日無駄話の著がある。

肌

刺激

ふさはし

(二)東京市牛込區神樂坂の北。神樂坂は牛込區の高臺で、最近の發展し、山の手に銀座までい

新秋を迎へるといふことは、樂みのあるものだ。萩や芙蓉の花に涼風が通うて、朝夕の風が冷え冷えと肌にはさはる。食べものなどでも、野菜物の最もよく味ははれる時分で、例へば、茄子なども小さいのが市に出て、味はひが香しい。刺激の新鮮な唐辛の葉を煮詰めたのも、この時分にはふさはしい食べものである。殊に果物屋の店頭を飾る葡萄に、夜の電燈の光があたつて、露の玉のやうな色に輝くのは、いかにもよく新秋の心持を語つてゐる。寺町から神樂坂あたりに、よく氣を附けて見てゐると、寺町から神樂坂あたりに、

一刻千金の値

晩方に人が華やかに出盛るのも、九月の初になつて學校がそろそろ始り、學生が再び都門に歸つて來た時分である。この時分がよく晴れた涼しい晩など、實に一刻千金の値がある。晝間はつくつくぼふしが銀鈴を振るやうな聲を立てて鳴きしきつて、夜は少しづつ蟲の音が垣根のまはりに聞えてくる。さうなつてくると、だんだん夏の眞盛の時分の、例へば、桶など日向に出して、はしやぎきつて緩んでゐたやうな心持が、新秋の涼味と共に緊つて來て、新たな希望を以て、新たな仕事に取りかゝらうといふ樂しい心持になつてくる。空の様子なども、眞夏の盛には光線が強過ぎて、よく晴

れてゐる時でも、水蒸氣が多く空が低く見える。それが初秋に近づくと随つて碧空が鮮かになり、白い雲は益、純白で、天地自然がどことなしにはつきりしてくる。さういふ白い雲際から起つてくる白い風が、庭の芭蕉や、高い梧桐の枝葉に音づれて、その音がだんだん冴えてくるやうな氣がする。一體夏は植物が生長する時であるが、水蒸氣が多いので、はつきりして見えない。それが初秋になると、あの五月頃の若葉の色に見る柔かさで、しかも爽かな明るさとはやゝ違ふけれども、その時分の若葉の隈に見るやうな鮮かさを持つて、木の葉や草の葉の先などが、鮮明になつてくる。

更ける

初秋の候には時雨が多くて、陰晴定まらない。さういふ時分に、洗濯物を物干に乾かしてゐるのに時とするとき雨がして、女が忙しげに取入れるところなどに、自ら秋のくるといふやうな、あわたししいやうな、また寂しい味はひがある。

象徴

(柑)

秋もやゝ更けてくると、いつしか芙蓉も凋み、萩も散つて、木犀きずながそこはかとなく匂つてくる。この木犀の香は、確かに秋を象徴したものである。木犀の匂ふ頃になると、だんだん秋もたけなはになつて行かうといふ時であるが、わたしは前にも言つたやうに、新秋の雲の色は實に綺麗だ。高山にゐれば殊によくそれが見られる。わたしは先年

(一) 棒名山(群馬縣)の中腹。海拔八五〇メートルの所にある温泉町。

(二) 神奈川県、箱根山。山水の美を兼ねた温泉場。関東第一の遊覧地。

伊香保に行つたをりに、殊にさういふ感じがした。九月の末頃のことであつたが、もう山をおりてくる時分に、高い山の一角から見ると、空が青いところは、手を觸れれば殆ど手が染まるかと思ふばかりの紺碧の色をして、山の岫を出た白い雲が、その空に影をかざしてゐた。九月の頃箱根にも行つてゐたことがあつたが、山道のところどころに設けたロハ臺の上に仰向に寝轉んで、一人で空を見てゐたことがある。高山で空を仰ぎ見るくらゐ、實に高く、遠い思のするものはない。

—青葉若葉—

二六 美しき國民性

執着

(一) 陸奥國信夫郡にある石の曲に絹布をあてて石の絹をさめたりして、石の絹の裏に後世に染するもの、すなはち、草で染するもの。

氣候は溫和である。山川は秀麗である。花紅葉四季をりをりの風景は誠に美しい。かういふ國土の住民が現生活に執着するのは自然である。現世を愛し人生生活を樂しむ國民が、天地山川を愛し、自然に憧れるのも當然である。日本の娘の着物の模様のはでやかなのは、西洋人の著書にもいつも歎賞してあるが、日本の秋の野の景色を見れば、なほ更これよりも綺麗である。自然に衣服にもこれが染まつてくる。昔のしのぶのすり衣、今の振袖模様、裾模様、つまりは同じことである。菊や、櫻や、梅や、牡丹を大きく

装束

甲冑
(澤潟)



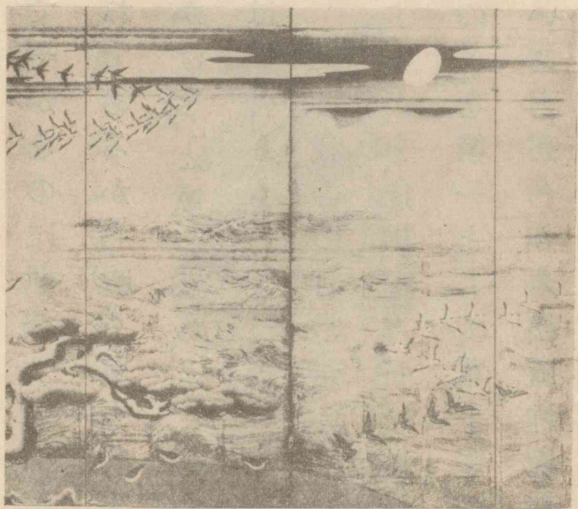
染出した友禪縮緬や、糯珍の帯から下駄や鼻緒の先まで、自然界の草木花模様で飾られてある。その色合の名稱でも、櫻色、桃色、山吹色、栗色、葡萄色など、植物界から取つた名が多い。昔の女装束は櫻重、梅重、山吹重など、重ねの色合はつねに四季をりをりの花に因んであつた。裾には大海の景色を描き、腰には唐草を縫つてある。優しい女流の装束は當然ともいはずが、武士の戦争にいでたつ甲冑装束にも、小櫻をどし卵の花をどし、おもだかをどしなど、いかにも優

(一)「吹く風を勿來の關と思へども道もせにちる山櫻かなし」(千載集、源義家)
(二)「行暮れて木の下かげを宿とせば、花や今宵のあはれならまし」(平家物語、平忠度)

(柳) 現象

美ではないか。總じて我が國の鎧甲冑は、當時の平服のはでやかなのに似合つて、いかにも美しいものであつた。それであるから、吹く風を勿來の關と歌ひ、行暮れて木の下かげを」と歌つても、よく似合ふのである。西洋の蝦甲冑では似合ふものではない。
更に我等の日常がいかにも植物及び自然界に興味を有するかを、食物の方面に見れば、春秋の彼岸の牡丹餅、お萩の名を第一として、菓子屋の目録を一見して、一層その多いことがわかる。松風、紅梅焼、磯松、桃山などの一般名稱はいふまでもなく、櫻餅、鶯餅、かしは餅の外、自然界の現象に取つたものでも、洲濱、時雨、越の雪、落雁、しほがま、さざれ石

(鮮)

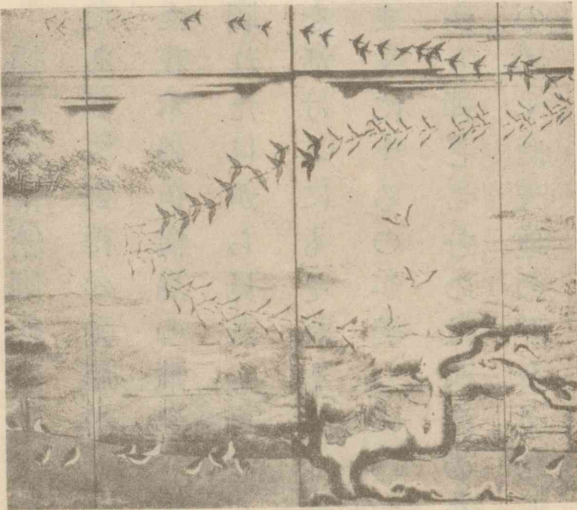


一のそ圖の禽水

などの類がある。名稱ばかりではない、形も花木に取るの
 が多い。干菓子は別して松の葉や、菊の花、すべて花木の形
 に作るのである。汁粉など
 も十二月にわけて、それぞ
 れの雅名がある。また下戸
 の領分ばかりでなく、酒に
 も櫻正宗がある。菊正宗が
 ある。山川の白酒がある。蓬
 萊の鳥臺は今も儀式の時
 に用ひられるが、魚類の料
 理もまた植物界、自然界とは離れぬ。刺身のつま、すしのつ

かしはで

Europe.



二のそ圖の禽水

まには笹の葉を敷く。牡丹餅を送るのに重箱に南天の葉
 を敷く。これは毒を消すと
 かいふまじなひから來た
 のでもあらうが、かしはで
 の名残もあらう。料理の膳
 碗は金蒔繪で花木の形を
 裝飾とする。漆器、陶器一切
 の美術工藝品が草木花鳥
 の繪であることは、もとよ
 りいふまでもない。それは裝飾美術として近世のヨーロッパ
 の美術に少からぬ影響を與へたものである。茶の湯

ものあはれ

だ武士であるから、あゝいふ傳説が附いたのである。頼朝も、尊氏も、秀吉も暇のある時は風流の技を玩んだのである。風流といふこと、詩的といふことの意味は、自然に向かつてのあこがれが、その大半を形作つてゐるのである。日本の武士道は、西洋の騎士道の如く婦人を崇拜せぬ代りに、自然の花を愛し、ものあはれを解したのである。

英雄豪傑ばかりではない、日本人ほど國民全體が詩人的なのは恐らくは世界中にあるまい。歌心は誰にでもある。今日日本で歌を作る人はどのくらゐの數であらう。宮内省への毎年の詠進は何萬といふ數である。歌を作らぬでも俳句を作る。どんな片田舎にも俳句の宗匠はゐる。神

詠進

遊山

社奉納の額面は到る所に小詩人の名を列ねてゐる。短くて作り易い短詩形であるから、上手でこそなければ、何人も作つて、花見、遊山の時にも一興とするのである。この花見といひ、雪見といひ、月見といひ、春は花、秋は紅葉、小詩人は誠に忙しいのである。悪事をはたらいて死刑に處せられる大悪人でも、死に臨んでは一首を口ずさむといふやうなのは、恐らくは他國にはないことであらう。我が國民は全國民を擧げて抒情詩人である、叙景詩人であるといつてもよいのである。

隱居

それ故我が國民は隱居すれば盆栽いぢりをする。歌や、插花に慰安を求める。昔は罪なくして配所の月を見たい

(一)源顯基、永承二年(一七〇七年)歿。
 風流三昧
 (二)歌僧。俗名は佐藤義清。二十三歳で出家。建久元年(一一八〇)山家集著した。
 (三)後鳥羽上皇に召された和歌所に出治の東北の宇山に入つて、方丈記を著した。
 (四)京都の東南。徳川初期の高僧。井伊侯に仕へたが、妻の死後僧となつた。歌文茶道をよくした。寛文八年(一七二八年)歿。年四十六。
 (六)名は誠、愛兒及なび夫を失ひ尼とくした。明治八年歿。年八十五。

といふ人もあつたが、日本人が世の中を厭ふといへば、風流三昧に日を送る。西洋でいふ厭世は、ほんたうにこの世の中が厭になるのである。自殺するより外に方法がない。日本人の厭世は、人事社會がうるさいのである。人事社會から遠ざかつて花鳥風月に近づけば、それで厭を思はなくなるのである。西行法師が世を遁れたといつても、一生行脚して花月を楽しんでゐた。鴨長明も頻りに世の中をあぢきなく思つたが、庵室にはいつて自然を楽しんで満足してゐた。その他深草の元政上人でも、近い頃の太田垣蓮月でも、世の中に立交るのは厭でも、自然といふ樂地は別にあつたのである。

二七月 雪花

雅興
 俚歌
 歴史的懷舊

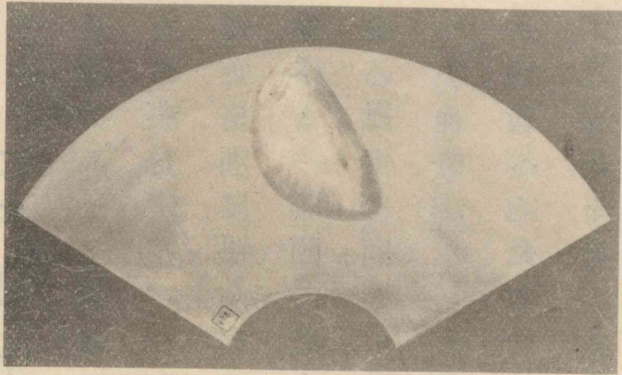
春はハナミ、夏はスゞミ、秋はツキミ、冬はユキミ、夏のミだけが、月雪花三つの眺に關係はないが、夏の月夜の涼はまた格別に快い。春の花見は昔の大宮人にも、今の丁稚小僧にも、一年間の最大歡樂である。芋、栗を捧げて秋の月を祭る風俗は、同じく一般國民的の雅興である。お月様いくつ。の俚歌「雪よふれふれ」の童謠、月雪花の風流は子供の時から教へられて、我等の頭にしみこんでゐるのである。月雪花を見て感ずるのは、歴史的懷舊の念が添ふからである。我が國の櫻花は唐人も高麗人も美しいといふに

徑庭

詩的教育

塵世

隱遁
皎々



月雪花の一 (前田青邨筆)

違ひないが、彼等の感ずるところと、我が國民の感ずるところとは、大きな徑庭がある。西洋人は觀月といふことに關しては、殆どなんの興味をももつて居らぬ。我等は子供の時から月雪花で教育された。月雪花を弄ぶといふ詩的教育を受けて來たのである。

風流の眞義は塵世を忘れることである。全く塵世を忘れて活動社會を離れることは、隱遁者の所行であるが、少くとも皎

體々

利慾に營々たり

蹉跎

吟詠
譬喩

皎たる明月、體々たる白雪、雲の如く霞の如き花に對して、これを眺めてゐる間は、いかなる人も利慾に營々たる實社會を忘れるのである。月雪花の效用は美術と同じく、人を高尚にし、人を溫雅にするのである。

我等日本人は月雪花を大いに觀賞して、これを人事と結合した。高尚な人格はこれを月雪花に譬へる。月に叢雲、花に風。月の入るのや、雪の消えるのや、花の散るのは、これを人の蹉跎や死去に譬へる。さうして、繁榮、隆昌、幸福は月雪花の美に比較した。古來の吟詠はすべてこの譬喩法を用ひてゐる。

我等は月雪花を尊敬し、月雪花に種々な美德を附加す

有情化
有徳化

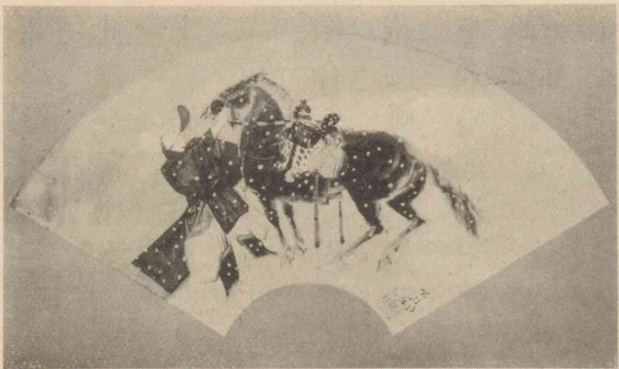
光風霽月

君子人

邪佞
なぞらふ

氷潔

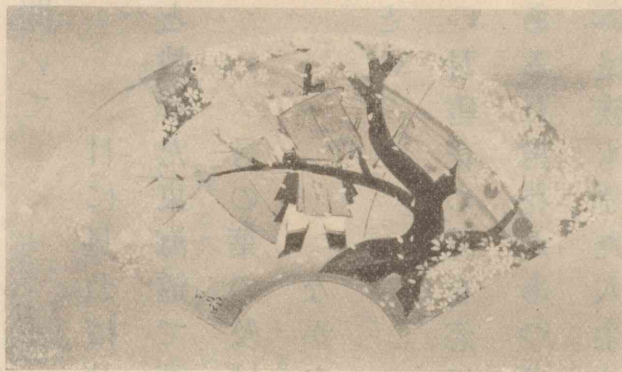
嚴肅



月雪花 二のそ (筆 青田前)

る。無情な物を有情化した上、更にこれを有徳化するの
 ある。月は公平無私、寸毫も汚のな
 いものとして、光風霽月などと熟
 語されて、君子人の赤心に比べら
 れる。月を蔽ふ雲はその光明を掩
 ふものとして、小人邪佞の徒にな
 ぞらへられる。また雪は氷潔一點
 の塵のないことから、冷たい嚴肅
 なところを見て、潔白な精神や節
 操の動かないことを聯想する。花
 は爛漫たる美しさの、忽ち風に散行くのを惜しんで、節義

(一) 埤氏。武蔵の人。
 群書類從の編
 者。文政四年(二
 四八一年)歿。
 年七十六。
 逸事



月雪花 三のそ (筆 青田前)

の士が身命をなげうつのに譬へる。月や、雪や、花やに靈が
 あつて、これ等の徳を備へてゐる
 やうに感ずるのである。古人がか
 く感じ來つたそのまゝを我等は
 承繼いで、我等もさう感ずるので
 ある。
 月雪花を觀賞し得る我等は幸
 福である。盲人の學者保己一の逸
 事として傳はつてゐる話に、或時
 月に對して、
 花ならば探りても見んけふの月

(一)紫宸殿のこと。

といった。また京都に上つた時、御所の南殿(一)の櫻の花盛と聞いて、

目に見ねばせめてなでんの櫻かな

と戯れた。東海道で富士の山下を過ぎる時には、

言の葉ことばの及およばぬ身みには目に見ぬも

なかなかよしや雪のふじのね

といつた。

民族 傳説 品性 國民性
月雪花の眺を恣まかにするのできない民族は不幸である。月雪花があつても、これに附加された傳説を有しない民族もまた人生の興味に乏しい。我等は月雪花に對して、古來の文學を味はひ、國家を憶ひ、品性を養ひ、國民性を

髣髴 肉眼 心眼

知ることができる。月雪花を通じて、我が國民の歴史は髣髴ふうふつとして眼前に浮かぶのである。保己ほご一は肉眼を以ての月雪花は見なかつたが、心眼を以ての月雪花は眺め得たのである。

改新女子國文 卷一終

昭和四年九月二十二日發行
昭和五年三月二十九日訂正再版發行
昭和五年四月十一日訂正再版發行

編者 芳賀矢一

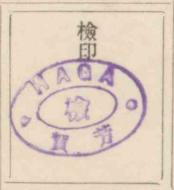
訂補者 橋本進吉

東京市神田區通神保町九番地

發行者 合資會社 富山房

代表者 坂本嘉治 馬房

印刷者 富山房印刷部



發行所 東京市神田區通神保町九番地 合資會社 富山房

電話九段一三三—一三三番
振替口座東京五〇一番

改新女子國文奧附

浦野製

昭和五年臨時 定價	昭和五年臨時 定價	昭和五年臨時 定價
自卷一 至卷四 各金四拾六錢	卷五、六 各金四拾壹錢	卷七、八 各金四拾錢
自卷一 至卷四 各金七拾五錢	卷五、六 各金六拾七錢	卷七、八 各金六拾五錢

